

第六編 合併前の五町の歩み

第一章 吉田町

鹿児島市の北部に位置し、蒲生・始良方面を結ぶ要というメリットを生かし、発展してきた。昭和47年11月、町制施行に伴い、村を町に改称、役場庁舎を現在の支所の位置に移転した。水田や畑地帯を有効利用して米、軟弱野菜、ニガウリ（レイシ）といった特産農産物を送りだしてきた。平成5年8月に災害救助法の適用を受ける豪雨災害に見舞われ甚大な被害を受けたが、全町をあげて災害復旧に取り組み、これまでも増して飛躍的な発展を遂げた。大型団地造成などが追い風になり、鹿児島市のベッドタウン化が進み、人口が急増した。

Ⅰ 地方自治の変遷

総合振興計
画を策定

政治 吉田町は第三次総合振興計画を平成5年4月1日に策定した。第二次総合振興計画を策定した昭和58年以降、人口も年々増加し、産業、教育、福祉の向上など町政は着実な発展を遂げたが、町を取り巻く社会、経済情勢は、都市化の進行、高齢化の進行、余暇の増大など各面において大きな転換期を迎え、こうした新しい時代潮流に的確に対応した振興計画策定が急務だった。

第三次振興計画は町勢発展の長期的展望に立って、吉田町の進むべき方向と目標を示すとともに、これを

達成するために必要な基本的施策を明らかにするものであった。計画は「基本構想」「基本計画」及び「実施計画」からなり、期間は5年度から9年度までの5年間を前期計画、10年度から14年度までの5年間を後期計画とした。

計画の理念として、きたるべき21世紀の新しい吉田町を創造するため、自然的、立地的特性を最大限に生かし、自然との調和を図りながら、緑の自然の中に「豊かな住みよい田園の町づくり」を計画の基本理念とし、また情勢の変化を的確に見極めながら町並びに広域行政等総合的な施策の推進に努めるとした。基本目標のキャッチフレーズとして、①調和のとれた豊かで住みよい生活基盤づくり②地域の特性を生かした活気のある経済環境づくり③健康で快適な明るい生活環境づくり④生きがいのある安心して暮らせる環境づくり⑤豊かな人間性と創造性にみちた人づくりを掲げた。計画の目標として、計画が終了する14年度の人口はおおむね1万2千人と予測した。その要因として、吉田町は県都鹿児島市に隣接し、また、年々高速道路や県道など交通網の整備により県内各方面へ通勤圏が広がるなど、就業機会や生活環境に大変恵まれた位置にある。また、大小規模の住宅団地の造成による居住基盤が整っていることから今後も人口の社会増が見込まれるとし、目標年次の人口を推計した。

第三次総合振興計画の後期基本計画を策定したのは、10年4月1日。前期計画後の経済情勢、地域性など生かした計画を打ち出すことを目的に、基本的施策として5項目を掲げた。「調和のとれた豊かで住みよい生活基盤づくり」では、優良農地の確保や農地の流動化、高品質農業を推進するほか、地下水の確保、幹線道路・町道の整備促進、防災体制の整備など挙げた。「地域の特性を生かした活気ある経済環境づくり」では、

新たな視点と発想による農村振興運動の展開、シイタケ・タケノコなどの特用林産物の振興、内水面の水産資源増大、商工会の育成、公害のない企業誘致の推進、総合運動公園を中心とした観光開発の促進をあげた。

「健康で快適な明るい生活環境づくり」では、地域の特性を生かした住みよい住居の確保や都市生活型公害の防止、居住環境と調和した自然保護の活用にも努めるとした。「生きがいのある安心して暮らせる環境づくり」では、福祉サービスの一層の質的向上と利用者の選択幅の拡大を図るとともに、健康的な生活習慣の確立を目指すため、包括的な健康づくりを進めるとした。「豊かな人間性と創造性にみちた人づくり」では、調和のとれた児童生徒の育成・教職員の資質向上など学校教育の充実と、生涯学習の推進計画の策定、社会教育施設の整備など盛り込んだ。

第三次総合振興計画が終了するのに伴い、15年3月に第四次総合振興計画を策定した。21世紀の町のあるべき姿と進むべき方向について「心豊かで活力にみちたやすらぎのあるまち」を基本理念に、5項目の基本目標を掲げた。1番目は「豊かな自然と調和したやすらぎのあるまちづくり」（生活基盤）で、地域の特性を生かした作物への転換可能なほ場整備を推進。宅地は都市計画マスタープランに基づき、自然環境との共存を目指した開発を図るとした。また、高齢者や障害者等にやさしい安全な歩行空間の整備もうたった。2番目の「地域の特性を生かした活力とにぎわいのあるまちづくり」（産業経済）では、地域のコミュニティ活動を促進する行動力ある農業・農村の担い手の育成や、集落排水施設の整備、地域社会の情報化、森林施業計画の作成など推進。また、企業立地の環境整備や特産品の加工施設の整備、輝楽里よしだ館を拠点に旬を感じられる農林産物の生産を推進することを挙げた。3番目の「人と自然が共生する潤いにみちた住みよ

「いまちづくり」(生活環境)では、公営住宅の整備、水道施設の整備・拡充、総合運動公園の整備・充実のほか、小型合併処理浄化槽の設置推進、自主防災組織の結成促進、交通道徳・マナーの高揚など盛り込んだ。4番目は「心が通い健やかで生きがいのあるまちづくり」(保健福祉)で、生きがい対応型デイサービスや訪問給食サービスなど在宅福祉サービスを推進。育児教室や延長保育の充実を通じ、子育てしやすい環境づくりを進める。低所得者層における自立更生の推進も盛り込んだ。5番目の「人々が共にふれあい地域と共に築く教育と文化のまちづくり」(教育文化)では、子ども会・高校生クラブ活動の充実、婦人学級・家庭教育学級の内容充実に加え、町民の健康増進・体力向上の推進、郷土芸能の伝承活動の継続・充実に努めることとした。

行政改革大綱を策定

吉田町は活力に満ちた魅力ある地域社会を築くために、新たな行政改革大綱を平成8年3月に策定した。行政改革推進委員会から出された提言をもとにまとめたもので、計画期間は、12年度までの5年間とした。昭和60年に第一次行政改革大綱を策定し諸施策の推進に努めてきたが、社会情勢の変化や21世紀を見据えた新たな行政課題に的確に対応できるよう、自主的、主体的に行政運営全般にわたる総点検実施に迫られていた。当面の措置方針として、主に次の項目を設定した。まず事務事業の見直しを挙げ、牟礼岡団地の給水施設及び汚水処理施設の維持管理を民間に委託することとした。組織・機構の見直しでは、総合運動公園及び文化体育センターの健全な管理運営と活用を図るため、保健体育課を新設することなど盛り込んだ。定員管理の適正化では、行政の効率化や住民に対する行政サービスの向上のため、OA化を推進することを挙げた。職員の能力開発等の促進では、市町村職員研修協会による研修に積極的に参加させ、町独自の研修も実施し、

職員の資質向上を図るなどとした。今後の検討事項としては、高齢者の生きがいづくりとしてシルバー人材センターの開設、行政組織の充実・強化の一環として企画財政課の新設、住民サービスとしては総合窓口の設置など網羅した。

11年4月、時代に即応した行政改革のために「大綱」を改訂した。事務事業や組織・機構の見直し、定員管理等の適正化、職員の能力開発等の促進、行政の情報化推進、行政手続きの簡素化・効率化など9項目の目標を掲げた。

全国吉田町
と姉妹縁組

鹿児島、愛媛、広島、埼玉、新潟の各県にある「吉田町」が集う第1回全国吉田町未来会議（吉田町サミット）が平成元年10月15日、愛媛県吉田町で開かれ、5町の町長、議長、商工会長らが未永い交流を誓い姉妹町盟約を締結した。5町が一度に姉妹縁組したのは全国的にも珍しく、学校や役場職員同士の「親せき付き合い」を皮切りに、やがては町民こそつての交流に拡大した。

吉田町サミットの発案は愛媛県の吉田町。昭和62年11月、鹿児島、広島、静岡、埼玉、新潟の各吉田町に同じ町名同士の友好と親善を呼びかけた。各町の町長、議長らの顔合わせなど経て未来会議開催が実現した。

鹿児島からは大角純徳町長ら6人が参加。会議では町長会議、議



全国吉田町未来会議（交流記念式典）

長会議の定期的な開催、夏休みなどを利用しての小中学生らの学習交流、児童・生徒の作品、声のたよりの交換、文化・スポーツ交流などが決まった。未来会議は持ち回りで開くことを決めた。

未来会議はこの後、埼玉、新潟、広島、埼玉で開かれ、第6回は平成7年11月11、12日に鹿児島で初開催。会場の町中央公民館に町長はじめ、議会や地域おこし関係者ら83人が参加した。静岡県の吉田町も新たに参加、全国の吉田町がすべて顔をそろえた。

会議では、鹿児島県の吉田町が一昨年、豪雨災害を受けたことから、災害時の各町間の連携態勢づくりを検討していくことを決めた。町文化体育センターで「未来会議シンポジウム」があり、「若者によるまちづくり」と題したパネルディスカッションを開き、多数の町民らも詰めかけた。また、今回は各町議会の常任委員長にも参加を呼びかけ、初の全国吉田町議員会議を開催した。

12年11月25日から3日間、鹿児島で2回目となる第11回全国吉田町未来会議が開催された。メインテーマは「めざそう！心豊かで活力にみちたやすらぎのあるまちづくり」。町長と担当課長が出席した町長部門会議では、今後の交流事業としてテーマを絞った会議にし、民間交流の輪を広げることを確認。また、小中学生のホームステイ事業に加えて、町職員の交流を検討することも話し合った。特産品販売については、イベントだけではなく、道の駅や販売所での展示販売、インターネット活用についても研究すべきとの意見も出た。未来会議に合わせ、町文化祭も同時開催し、愛媛の七つ鹿踊りや広島の子ども神楽、新潟の吉田甚句などの郷土芸能が披露された。全国吉田町の特産品や作品展示コーナーも設けられ、多くの町民が会場を訪れて産業、文化を満喫した。

一方、未来会議に参加する「吉田町」の婦人会や商工会、各種グループで活動している各町の女性が一堂に会し、「それぞれの立場で地域に根ざした生きがいづくりを目指そう」と、全国吉田町女性大会が4年にスタートした。毎年持ち回りで開催され、鹿児島では初めてとなる第5回大会が8年10月25日から3日間、町文化体育センターで開催、新潟、埼玉、静岡、広島、愛媛各県の吉田町から69人の参加があった。「進めよう女性参画 築こうネットワーク」のテーマのもと、ごみ問題や介護、教育などさまざまな分野で活発に意見交換した。大会では「環境」「福祉」「教育」「組織運営」の4分科会を設け、参加者が各町で取り組む分野に分かれて、意見を出しあった。各分科会では、「共働きの家庭では、夫が炊飯器のスイッチを入れるだけでも、男女共生の第一歩になる」「学校教育を悪く言う親がいるが、『男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしく』という家庭教育にも問題があるのでは」などの意見が出た。女性大会は10年から未来会議の女性部門へ統合された。

未来会議はこの後も毎年開催されたが、市町村合併に伴い15年の第14回で終了、「産業、教育、文化などさまざまな分野で交流を重ね、友好と親善を深めてきたことにより、住民自体のまちづくり、個性あるまちづくりに寄与してきた」と意義を評価した。この後、民間主体の交流を継続することを確認した。

町誕生の節
目を祝賀

町制施行20周年記念式典が平成4年12月6日、総合運動公園であった。式典には来賓並びに招待者、功勞表彰者含めて約300人が出席した。吉田町は明治22年に「市町村制施行」により吉田郷から吉田村に改称し、昭和47年11月、現在の役場庁舎落成と同時に町制を施行した。町制施行時7千人弱だった人口も1万3000人余りに達し、鹿児島市近郊の緑豊かな田園の町として、さらなる飛躍が期待された。式典では地方自

治や教育文化などに功労があつた77人と、農林産物共進会入賞者や優良生産グループなど45人、2グループに表彰状が贈られた。

14年12月1日には町制施行30周年を祝う記念式典が文化体育センターであつた。式典には町内外から来賓や招待者、功労者、多数の町民が出席した。式典では西園登町長が30年の歴史を振り返り、「本町は、平成5年の大水害により大打撃を受けたが、皆の協力で乗り切ることができた。これからは、これを後世に伝えていくことがわれわれの使命である」と式辞を述べた。また、これまでの町勢の発展に多大な貢献をした「地方自治」「社会福祉」「産業経済」「教育文化」「社会体育」「一般」の各部門20人、1団体の表彰が行われ、各部門の代表者に、西園町長から表彰状と記念品が授与された。また「よしだ町ふるさとまつり」も同時開催された。

町の人口、
着々と増加

町の人口が平成2年12月17日、1万人に達した。昭和45年ごろまで人口減少がみられたものの、47年に町制を敷いて以降増加に転じ、55年ごろからは牟礼岡団地や大原地区への入居が急増、鹿児島市のベッドタウン化が進み、この年の国勢調査で人口増加率県内トップとわかった。県内には当時、市を除く73町のうち1万人を越す町は27あり、同町は28番目の「1万人町」となった。

平成7年1月1日現在の住民基本台帳によると、1万1038人に達した。人口増加率では、2年から6年の4年間で、県内96市町村中トップだった。

人口増加率は、住民基本台帳による平成2年10月現在と同6年10月1日現在を比較したもので、この間増加しているのは15市町。吉田町の増加率は9・7%で1位。2位は松元町(9・3%)、3位は隼人町(7・

7%)だった。地域別に見て、本名地区、牟礼岡地区の増加割合の大きいことが分かった。

大角純徳町長は、人口増の要因について、牟礼岡団地や大原台地付近が鹿児島市のベッドタウン化していることや、九州縦貫自動車道や県道鹿児島・蒲生線など幹線道交通の便がよいこと、環境がよく、高校進学が鹿児島学区である、桜島の降灰が比較的少ないなどを挙げた。

町内の各集落と、病院や役場など主要施設を結ぶ巡回バスの運行が、平成14年9月10日、始まった。お年寄りらがさっそく利用し、便利な「足」の誕生を喜んだ。南国交通に運行を委託し、29人乗りのマイクロバスが使われた。町役場を起点に、西佐多浦・東佐多浦地区を周回するコースと本名地区を周回するコース、町役場と牟礼岡団地を往復するコースの計3路線を、各路線週2日ずつ走らせた。

町には、以前から「病院や買い物に行く交通手段がほしい」という声が多く寄せられ、準備を進めてきた。料金は中学生以上が100円、小学生が50円、未就学児は無料だった。

15年11月1日からは、町内巡回バスに特別乗車料金割引券交付事業を始めた。障害者等の社会参加を促進し、障害者福祉の増進を図ることを目的として、身体障害者手帳並びに療育手帳所有者にバス乗車料金の2分の1に相当する額の割引券を交付した。



町内巡回バス

対象は①町内に居住し、本町の住民票に記載され、または外国人登録原票に登録されている者のうち、未就学児及び小学生を除く者②身体障害者手帳、療育手帳を所持している者とした。

町内巡回バスは15年11月1日から4路線、翌16年6月1日からは6路線に増え、合併後は鹿児島市コミュニティバス「あいばす」となり、その後、月水金曜日運行と火木土曜日運行に大別されている。

牟礼岡団地・前迫団地内公共施設の町移管完了

町と民間の宅地造成会社が牟礼岡団地（三井ニュータウン）で平成7年から進めていた、公園や上下水道などの町への移管が終わり、8年4月1日、町役場で移管調印式があった。同団地は、三井農林が昭和52年から約1200戸を目標に開発を始め、公園、道路、水道、街灯などの生活に必要な11施設を維持・管理してきた。町企画課によると、移管は町と同社との間で交わした協定や確約書に基づくもので、全体計画戸数の7割以上が入居した時点で、すべての施設を町に無償譲渡する決まりだった。

町は6年度から三井側と本格協議を始め、町民代表も入れた検討委員会をつくり検討していた。同団地は鹿児島市のベッドタウンとして人口が増加、約900戸3千人が住んでいた。また、同じく三井農林が開発・管理していた宮之浦の前迫団地も牟礼岡団地とともに、管理を町へ移管した。

町は10年11月1日から牟礼岡連絡所（旧三井事務所）に住民票の写しと印鑑登録証明書の自動交付機を設置した。交付機の設置は始良郡牧園町、国分市に続き県内で3番目。これにより、現在の印鑑登録証に暗証番号を登録申請することにより、住民票の写しと印鑑登録証明書の交付を受けることができるようになった。

町役場から約9キロ離れた同地区には、町民の3分の1が住んでいる。連絡所に町民課、税務課職員が週1回通って証明書など発行していたが、不便との要望が出ていたため、自動交付機設置を行った。

過疎地域活性化特別措置法の指定から外れる

平成2年3月末で期限切れとなる過疎地域振興特別措置法（過疎法）に代わる過疎地域活性化特別措置法が新たに制定されたのに伴い、町はこの新過疎法の指定要件から外れ、過疎地域から除外された。

10年間の時限立法であった旧過疎法（昭和55年—平成2年3月）が期限切れとなるため、政府は「新たな過疎対策」として新過疎法を制定した。新過疎法の過疎指定要件は①昭和35年から60年まで（25年間）の人口減少率が25%以上②同期間の減少率が20%以上で、昭和60年時点での高齢者（65歳以上）の比率が16%以上③同期間の減少率が20%以上で、昭和60年時点での若者（15〜29歳）の比率が16%以下であることの一つを満たすことに加えて、財政力指数（標準的な必要経費に占める自主財源の割合）が、昭和61年度から3年間の平均が0・44以下であることとなっていた。

町の昭和35年から60年の人口減少率が3・7%で、要件にあてはまらず、過疎地域から除外されることになった。除外されることにより、これまでのような国庫補助の特例措置はなくなり、また過疎債（町の借入れ金）は、毎年20%ずつ削られる5年間の経過措置が取られる。これまで、過疎債に頼ってきたものを他の財源で補っていくことになった。県内では吉田町、加世田市、郡山町、高尾野町、串良町の1市4町が指定からはずれ、新たに桜島町、牧園町、霧島町、笠利町の4町が指定を受けた。

吉田町閉町式を挙行
合併に伴う吉田町の閉町式が平成16年10月29日、町中央公民館集会所であり、役場職員ほぼ全員が出席、新市の職員としての業務へ思いを馳せた。西園登町長は全職員に表彰状を贈った後、「町の躍進は、職員の努力のたまもの。私自身みんなのおかげで楽しく、有意義に職務を務めることができた」と謝辞を述べると、ハンカチで目頭を押さえる職員の姿が見られた。

合併に伴い失職する西園町長と船脇一見助役、芝貞夫教育長に感謝状と花束が贈られ、職員全員で万歳三唱し、締めくくった。

よしだ町ふるさとまつり

経済 「わが町・わがむらイメージアップ」をテーマに、第1回よしだ町ふるさとまつりが平成2年12月2日、町中央公民館と本城小学校で開かれ、約3千人が楽しんだ。オープニングセレモニーでは、大角純徳町長が「生産者と消費者が楽しくふれあう祭りにしよう」とあいさつした後、優良農家を表彰した。

本城小の校庭にはテントが張られ、町内の農家が持ち寄った野菜、果物、手作り作品などの販売や、農機具の展示即売コーナーが設けられ、バザーもあり賑わった。注目を集めたのは、全国吉田町のコーナーで、新潟や埼玉、広島、愛媛の特産品が並び、飛ぶように売れていた。郷土芸能の西下獅子舞、牟礼岡小児童の牟礼岡太鼓、谷上棒踊りも披露され、祭りを盛り上げた。また、歌謡ショーや卵のつかみ取り・もちつき大会、抽選会もあり、吉田の連帯感を高めた。

まつりは合併前の16年まで毎年開催され、町民の連帯感を培う場になった。合併後は「よしだ地域ふるさとまつり」となり、開催されている。

町のイメージキャラクター「よしだスタチャン」誕生

町の代表的な特産ニガウリの販路拡大を狙おうと、町が作製したイメージキャラクターの愛称発表会が平成9年4月4日、町役場であった。愛称は牟礼岡西集落の前田将吾君が名付けた「よしだスタチャン」に決まった。式に出席したニガウリ農家20人は「これからのニガウリ販売に大いに期待できる」



イメージキャラクター
「よしだスタチャン」

と満足気だった。

町は水田転作などを目的に昭和61年からニガウリの推奨を始めた。町の特産品として定着しつつあるニガウリは、太くて緑が濃く、「スタミナチャンピオン」の名で市場でも高い評価を得ている。青果物はもとより加工品の開発も進んでいる。町では、このキャラクターを十分活用し東京や大阪等への販売促進に努め、吉田町のイメージアップへつながった。

新商工会館
が落成

本城に町商工会の新しい会館が完成、平成11年5月17日に落成記念式典が行われた。関係者から「新会館が吉田町の商工業発展の拠点になれば」と期待された。

これまで商工会は、役場前にあつた町所有の建物に間借りしていた。旧会館には会員の相談を受ける個室もなく、また、商工会の業務も増えて手狭になったことから、昭和62年から建設資金の積み立てを始め、平成7年の通常総会で新会館づくりを決議、建設を進めていた。

新会館は鉄筋コンクリート造り2階建て、延べ床面積約410平方メートル。相談室や資料室、コンピューターを使った帳簿の付け方も学べる記帳指導室を備えた。2階には青年部・婦人部の研修室や資料室、特産品展示室などが設けられた。総事業費は約9千万円。



吉田町商工会館

デイサービス事業開始

社会 吉田町のデイサービス事業が平成4年3月20日から始まった。特別養護老人ホーム「寿康園」にセンターが完成、町が委託し給食や入浴、日常動作訓練など在宅療養者のための各種サービスを提供した。センターは鉄筋2階建て、総面積471平方メートル。介護者を対象に講座などを行う介護者室、マッサージ効果のある炭酸ガスぶろ、食堂ホールなどがある。総工費1億3410万円。利用できる人は、町内居住の概ね65歳以上の虚弱老人で189人が登録。利用料金は給食材料代、入浴を含めて1日900円と設定された。

防災行政無線が運用開始

平成8年度から整備を進めてきた町の防災行政無線が、9年4月1日に開局した。町内の全4200世帯に設置したほか、22カ所に屋外拡声器も整備され、町民がどこにいても情報が伝わるようになった。事業総額は約2億1千万円。町では5年夏の豪雨災害で死者5人、負傷者14人、総額89億円にのぼる甚大な被害を受けた。このため、議会や住民から防災無線の設置を求める強い要望があり、悲惨な被害は繰り返さないと、防災行政無線の運用を計画した。初期防災活動の連絡や避難情報など緊急時の情報を、各世帯の受信機に発信、被害を最小限にとどめるのが目的だった。

このシステムは、役場内の無線室から中継局（県青少年研修センター内）に電波を発信して、全世帯の受信機に送る。災害時の情報伝達だけでなく、平常時には行政事務連絡や住民サービスのための生活情報の提供、また日に5回、一部地域を除きミュージックチャイム放送がされるなど、地域生活に密着した様々な運用を行った。また、公用車や消防車、集落の避難場所20カ所に移動型の防災行政無線の設置工事も進めた。

シルバー人材センター発足

吉田町シルバー人材センター設立総会が平成12年4月3日、町地域福祉センターであり、会員83人中、54人が出席した。農作業、公園清掃、庭木の手入れ、伝票整理といった専門技術、家事援助サービス、広報な

輝樂里よしだ館が落成

どの配布、あて名書きなどの事務、施設管理、介護や家事手伝いなど、高齢者の知識や経験を生かした幅広い仕事を引き受けることになった。会員は原則60歳以上。仕事は希望に応じて割り振る。当時、県内に47センターあり、鹿児島郡内での設立は初めてだった。

本城のふれあいパーク吉田内に、町内では初めての物産館となる「輝樂里（きらり）よしだ館」が完成、平成14年4月21日にオープンした。木造平屋建てで、延べ床面積は113平方メートル。鹿児島市と始良町、蒲生町方面を結ぶ県道沿いに立地し、生産者らでつくる組合が運営する。野菜や花、総菜、陶器など、商品は生産者が直接店に運び込むのが特徴。オープン記念として、全国吉田町交流事業をきっかけに交流を続けている広島県吉田町から竹炭のオブジェがプレゼントされ、館内に展示された。

町文化体育センターが落成

教育・文化 平成4年度から2カ年で総合運動公園内に建設を進めてきた文化体育センターの落成式典が6年2月27日にセンターで行われた。3月1日から開放され、バレーボール愛好者らに利用された。

センターは鉄筋コンクリート一部鉄骨造り3階建て、延床面積5855平方メートル。外壁と屋根にガラスを多用し、自然光をふんだんに取り入れる構造になっている。1階には9人制バレーボールコート4面が取れるアリーナがあり、バスケットボール、バドミントン、テニス、卓球も楽しめる。また、トレーニングルーム、



輝樂里よしだ館

幼児体育室、身障者用の観覧席を配置した。2階には804人収容の客席、雨天用ランニングロード、展望バルコニーを設けた。冷暖房や音響、照明設備も備え、コンサートやバレーボール国際試合も可能となった。式典には各種関係団体長や集落館長ら約250人が出席した。大角純徳町長が「多くの町民が一堂に参集しての行事を開催する場所がなく、施設建設が町民の願いだだった。町民皆さんの文化体育センターとして育てていただきたい」とあいさつした。

II 行政機構の変遷

町長

第3～7代 大角 純徳（昭和54年4月27日～平成11年4月26日）

昭和32年の教育委員会総務係長を皮切りに、総務課長、収入役を歴任した後、5期20年間にわたり町政を預かった。町長在任中、総合運動公園や文化体育センターの建設の他、牟礼岡小学校の新設開校、牟礼岡団地の移管継承、町内各地区における土地基盤整備、佐多浦工業団地の整備、全国吉田町姉妹縁組の締結などに尽力した。平成5年の記録的集中豪雨による未曾有の大被害では、復旧の陣頭指揮に立った。鹿児島郡町村会会長なども務めた。平成12年春の叙勲で勲四等瑞宝章受章、16年度の県民表彰（地方自治部門）を受賞した。

第8、9代 西園 登（平成11年4月27日～16年10月31日）

町農林課長、総務課長など歴任、町議も3期務めた。大角純徳前町長の業績を引き継ぎ、前年に策定され

た第三次総合振興計画後期基本計画を推進した。本城の県道蒲生線沿いには町内の特産品を扱う「ふれあいパーク」を開設させ、パーク内に物産館「輝楽里（きらり）よしだ館」もオープンさせるなど、地域の活性化に尽力。町内巡回バス運行とそれに伴う乗車料金割引券交付事業を手掛けた。また、平成元年から続いていた「全国吉田町未来会議」の第11回大会の町内開催を成功させるなど、町内外の施策遂行に手腕を発揮した。平成17年秋の叙勲で旭日双光章を受章した。

助役

梶原 哲哉（昭和54年12月24日～平成7年12月23日）

石下谷 努（平成8年4月1日～平成11年4月26日）

野間 俊和（平成12年4月1日～平成15年3月31日）

船脇 一見（平成15年7月1日～平成16年10月31日）

収入役

福崎 秋夫（昭和59年5月1日～平成2年3月31日）

石下谷 努（平成2年4月1日～平成8年3月31日）

船脇 一見（平成8年4月1日～平成15年6月30日）

III 町議会

歴代議長

寺師 幸男 (平成元年4月26日～平成5年4月24日)

西園 登 (平成5年4月26日～平成9年4月24日)

後藤 重信 (平成9年4月28日～平成13年4月24日)

米満 忠 (平成13年4月27日～平成16年10月31日)

歴代副議長

脇田 高德 (平成元年4月26日～平成5年4月24日)

後藤 重信 (平成5年4月26日～平成9年4月24日)

山之内三雄 (平成9年4月28日～平成13年4月24日)

福石 尚弘 (平成13年4月27日～平成16年10月31日)

町議会議員の選挙

平成13年4月22日	76・36%	16人	19人
平成9年4月20日	79・63%	16人	21人
平成5年4月18日	85・48%	16人	19人
平成元年4月16日	90・01%	16人	20人
	投票率	定数	立候補者

参考文献・資料 吉田町広報紙、南日本新聞記事

第二章 桜島町

錦江湾を挟み鹿児島市の東側対岸に位置し、有史以降、活火山「桜島」と共生してきた。昭和20年から鹿児島市との合併に対する動きが出たが、自主独立の機運の中、立ち消えとなってきた。48年5月に桜島町として町制を施行した後、県都と結ぶフェリーの相次ぐ投入、桜島小ミカンや桜島ダイコン栽培など島独自の農産物の生産などで、町は活気に満ちあふれてきた。国民宿舎「レインボー桜島」や「桜島マグマ温泉」などオープンし、島外客の誘致を進め、ほぼ全域が霧島屋久国立公園（現・霧島錦江湾国立公園）に指定されているという地の利を生かし、火の島観光に力を入れてきた。

Ⅰ 地方自治の変遷

総合振興計
画を策定

政治 桜島町は第三次総合振興計画を昭和61年3月に策定した。55年10月に第二次計画を策定したが、その後降灰禍克服や独自の振興策を打ちだす趣旨で、計画期間は65年度（平成2年度）までの5年間とした。基本理念「活力とぬくもりにみちた豊かな火の島の歴史に生きる町」のもと、4項目の目標を掲げた。第1章の「豊かで活力ある生活基盤づくり」では、人口増に備える水源開発、国道、県道の整備促進、桜島大爆発に備えた避難港などの整備推進、防災営農事業による施設栽培の推進、養殖魚種の一部転換による養殖期間の調整など掲げた。第2章は「快適で生きがいと思いやりのある町づくり」。袴腰溶岩地での公営住宅の用地化、成人病予防に対する知識の普及啓発の推進のほか、地域ぐるみの栄養改善運動の活発化、各分野に

わたる老人社会活動の充実など挙げた。

第3章は「豊かな未来を創造する人づくり文化づくり」で、学校教育現場では教育相談を通じた学業指導の充実や小中学校施設設備の充実と空き教室の活用推進、公民館視聴覚室設備の充実、マグマ太鼓新設による新伝統の構築など列挙した。第4章は「公営企業の健全運営と魅力ある観光地づくり」で、保有フェリーの代替船建造・接岸施設整備、国民宿舎さくらじま荘の外装工事や客室改装で利用客増を図る。第一溶岩グラウンドにナイター照明施設建設で利用者増推進のほか、ビクター施設の整備を推進するとした。

21世紀を見据えたビジョンづくりを推進するため、平成3年3月には第四次総合振興計画を策定した。「健康で活力にみちた豊かな火の島の歴史に生きる町づくりをめざして」を基本理念に、12年度までの10年間を目標年次と定め、前期を6年度までの4年間とした。

基本計画は5章に分かれ、第1章の「快適で生きがいと思いやりあるまちづくり」では、袴腰地区克灰タウン事業の推進、土石流災害危険河川に対する監視の強化、高齢化社会を支えるボランティア活動の推進などうたった。第2章の「豊かな未来を創造する人づくり・文化づくり」では、子どもたちの自主的な学習意欲の喚起、教職員住宅の計画的建設、婦人の生涯学習への意識高揚の促進など挙げた。

第3章の「豊かで活力ある生活基盤づくり」では、桜島小ミカンの高品質生産によるブランド化、農業用設備の近代化、桜島特産の土産の地元生産体制の確立など明示した。第4章の「公営企業の発展と魅力ある観光地づくり」では、桜島港フェリーターミナルの改修、国民宿舎さくらじま荘の客室内装改修、溶岩展望所の建設を促進するとした。第5章の「行財政計画」では、地域振興にかかわる総合調整機能の強化、適正

な人事管理の実施など挙げた。

第四次総合振興計画の後期基本計画を策定したのは、7年3月。前期4カ年の成果やその後の社会・経済情勢を踏まえ、後期6カ年の目標を掲げた。第1章は「快適で生きがいと思いやりのあるまちづくり」。在宅福祉サービス推進へホームヘルパーの増員、温泉センターを核とした保養施設の整備のほか、住宅需要に対応する地域分散型住宅の整備拡充、幹線町道の改良促進、桜島火山対策懇談会による噴火降灰対策提言の促進など掲げた。第2章は「豊かな未来を創造する人づくり・文化づくり」。総合的な生涯学習の推進体制の整備や郷土の伝統・風土を生かした郷土教育の推進など挙げ、町民ニーズに応えた公民館講座の拡充、各種スポーツイベントの企画・誘致を進めるとした。

第3章の「豊かで活力ある生活基盤づくり」では、克灰農業・水産業の振興、袴腰周辺の商店街の整備促進、特産品ブランド化を目指し農産物加工施設の有効利用、地場産業の発展と地域活性化を図るための「道の駅」の構築などをうたった。第4章は「公営企業の発展と魅力ある観光地づくり」。桜島フェリーの代替船建造、フェリー接岸施設の整備、老朽化した町営バス車両の年次的更新を行うこととした。第5章の「行財政計画」では、行政組織の見直し・再編を通し、行政事務の円滑化を推進、老朽化が進む町庁舎を年次的に改修するとした。

第五次総合振興計画は平成13年3月に策定した。新たな発想から町の進むべき方向、施策を明らかにするのが狙い。22年度までの10カ年が計画期間で前期を16年度までの4カ年と定めた。『世界の桜島』元気のゆるまちづくり」を基本理念に、6分野の基本計画を明らかにした。第1節の「働き盛りのやる気に応えるま

ちづくり」では、農業、水産業、商工業などの振興策を提示。降灰対策の被覆施設栽培を中心とした農産物生産の確保を図り、活魚流通システムを確立する。火山資源を活用したアイデア商品の開発の推進も挙げた。第2節は「若者の元気に応えるまちづくり」で、若年層向け住宅を整備、人材育成のための塾「元気塾」活用で集落・町おこしの推進をうたった。国・県道の改良を進め、治山・砂防事業の促進と事業費枠拡大の要請も明記した。第3節は「高齢者などの安心に応えるまちづくり」で、健康づくりに関する情報の提供に努めるほか、各種がん検診に取り組み、疾患の罹患予防、早期発見、早期治療の促進に努める。児童の保護と健全な育成対策に積極的な施策を講じることも掲げた。第4節は「子どもの夢に応えるまちづくり」で、郷土愛を育むために、ふるさと体験学習の機会を増やす。マグマウエーブ講座や出前講座など多様な生涯学習を推進し、スポーツ施設の整備充実、ボランティア活動の推進や町民の国内外研修を奨励し、次代を担う人材育成を図ることとした。第5節の「公営企業の発展と魅力ある観光拠点づくり」では、桜島港フェリーターミナルのバリアフリー化へ改修を進め、観光地桜島の受け入れ態勢を整備。活火山と共生する風土を生かした「体験型交流観光」を積極推進することも挙げた。第6節の「行財政改革」では、住民ニーズに対応する組織の見直し、情報社会に対応した効率的な行政システムの確立を挙げた。

行政改革大綱を策定

町は平成8年6月、第二次行政改革大綱を策定した。昭和60年12月に第一次行政改革大綱を策定し改革を推進してきたが、本格的な高齢化社会到来や情報化、国際化の進展など町政をめぐるニーズに即応するため、新たな大綱策定に迫られていた。

当面の措置事項の主な内容として、一つ目の事務事業の見直しでは、職員の提案制度を設け、事務改善に

資する。事務決済区分を見直し、事務の簡素化・迅速化を図るなど挙げた。二つ目の時代に即応した組織・機構の見直しでは、技術系職員の配置体制を再検討して事務の効率化を図る。企画調整課の体制を強化し、企画力、事業導入などについての研究の充実を図るなど掲げた。三つ目の定員管理及び給与の適正化の推進では、全庁的に組織・機構の点検を行い、定員適正化計画を策定する。船員の週40時間制への移行に伴い、海事職給料表の見直しを検討することなど強調。四つ目の効率的な行政運営と職員の能力開発等の推進では、地方分権の時代に対処するため、県や民間への派遣研修を行い、職員の資質向上を図る。企業部の労務管理について統一性と一元化を図るために管理課で統括するなど挙げた。五つ目の行政情報化の推進等による行政サービスの向上では、交通事業における料金徴収、収納関係のOA化を進め事務の効率化とサービスの向上を図る。情報化の推進にあたっては町民のプライバシー保護に万全の措置を講じるとした。六つ目の会館等公共施設の設置及び管理運営では、旬彩館の管理体制、運営の主体性等抜本的な検討を行う。城山自然恐竜公園等観光施設の環境整備を積極的に進め、より一層の活用を図ることになった。

その後、21世紀の魅力ある町政を実現するため、13年10月に第三次行政改革大綱を策定した。重点事項として財政構造の健全化、職員定数及び給与制度の適正化、行政の透明性・公平性の向上など8項目を掲げた。

ふるさと創
生事業ス
タート

国の「ふるさと創生事業」が平成元年4月にスタートしたことに伴い、桜島町では国からの1億円に7600万円を上積みし、使い道をめぐり、各種機関や団体代表による懇談会や町職員の提言、町民からのアイデア募集など検討を重ね、年度事業として「花と緑と野鳥の里づくり」「温泉掘削」「桜島総合開発ビジョンづくり」「青少年国際交流事業」の四つが決まった。

「花と緑と野鳥の里づくり」には4758万円を投入。降灰被害による廃園や遊休農地をよみがえらせるため、開墾したあとにツバキや桜島小ミカンを植栽する計画をたて、合併直前までミカン等苗木補助事業を継続した。「温泉掘削」は5千万円かけて、北部地区の活性化を図るため温泉ボーリングを実施することを決めた。「桜島総合開発ビジョンづくり」には1500万円を確保、桜島の定住圏構想に、ウォーターフロント構想を盛り込んだ総合的なビジョンづくりを行うことになった。「青少年国際交流事業」は1千万円の基金を設け、国際感覚豊かな青少年育成を図るため、友好都市盟約を締結しているアメリカのリボン市へ派遣することを検討、3年度から派遣事業を展開した。

アメリカのカリフォルニア州のリボン市と桜島町が友好都市盟約を締結することになり、昭和61年10月16日に調印式が行われた。桜島町の町花「桜」とリボン市特産の「アーモンドの花」が同じバラ科であることが縁で、永久の友情を誓い、信頼の絆を結ぶことになった。

リボン市のファイトマイヤー市長夫妻が桜島フェリーに乗船、溶岩原や錦江湾を一望できる湯之平展望台を見学した後、桜洲小学校での歓迎式に出席した。全校児童233人が参加し、同校器楽部のマーチングドリル演奏でリボン市長らを歓迎した。鹿児島市の城山観光ホテルであった調印式には、両市町の関係者が出席し両国の国歌演奏の後、協定書に署名し、アーモンドとツバキの苗木300本の目録を交換して、産業、文化、教育等の交流促進を誓い合った。

平成元年には町がツバキの苗木250本を贈呈、リボン市の歴史館前に植樹された。3年8月には竹ノ下光町長がリボン市長を表敬訪問したほか、同年度から16年度にかけ、青少年国際交流派遣事業を実施、毎年

アメリカのリボン市と友好都市盟約締結

マグマプラン21策定

10人の中高校生がリポーン市およびその周辺で約1カ月間ホームステイして交流を深めた。

町は21世紀に向けて活力に満ちた町づくりを進めるために、平成2年8月に「桜島マグマプラン21」を策定した。火山や海、豊かな産物などの特色を生かし、それぞれの集落を単位としたゾーンの確立と、個々のゾーンの性格づけを行った。

産業振興ゾーン（赤水地区）では採石跡地等を生かし、商工業を中心とした施策を進める。自然公園利用ゾーン（袴腰地区）は観光宿泊施設の整備を行い、溶岩と海、自然公園との調和を図る。海洋資源活用ゾーン（小池、赤生原地区）はハマチ養殖が盛んなことから、二次加工工場の増設による市場拡大を図るなど、海洋資源を活用した地域発展を期するとした。

住宅整備ゾーン（武、藤野地区）は鹿児島市のベッドタウンとして住宅を整備、人口増加を図る。都市の中核的役割が強まると想定される中枢機能整備ゾーン（西道、藤野地区）は、町民にとってシンボリックな位置づけとする。保養施設整備ゾーン（松浦、二俣、白浜地区）は、白浜に掘削中の温泉を最大限に利用した長期滞在型のリゾート開発を目指す最適地とした。島部レクリエーションゾーン（新島、沖小島地区）では、人の活動が可能な新島と沖小島に島の活性化の一環として夏型の海浜性レクリエーション施設の開発を考えるとした。

すこやかベビー誕生祝金制度スタート

町は人口対策の一つとして、「すこやかベビー誕生祝金制度」を平成3年7月から始めた。より多くの出産を奨励し次代を担う児童の成長を願って祝金を支給するのが目的で、額は第1子3万円、第2子5万円、第3子以降は10万円。さらに第3子以降の子どもは1歳誕生日に10万円、2歳誕生日に30万円が支給される

町制20周年
記念式典挙
行

ことになった。制度は8年度に廃止され、翌9年度から新たに「すこやか子育て支援金制度」が始まり、支給対象は第3子以降に変更された。16年の合併により制度は廃止されたが、合併以前に第3子以降の子どもを出生した人については、22年度まで支給された。

昭和48年に町制を施行してから20年目にあたる平成5年5月1日、町体育館で町内外から370人が参加して、記念式典が催された。式典では自治功労者などの表彰が行われ、午後からの祝賀会では桜島小みかんワインや桜島音頭の発表会が行われるなど、盛大なイベントとなった。式典に先立ち、桜島フェリーターミナル前から地元小・中学校、鹿児島実業高校プラスバンド部など総勢150人が、会場の体育館までマーチングパレードで花を添えた。功労者表彰では、横山金盛前町長ら33人、1団体に表彰状と記念品が贈られた。合併に伴う桜島町閉町式が平成16年10月17日、総合体育館で開催され、町民や町職員ら約300人が出席した。明治22年の西桜島村誕生から115年の歴史を刻んできた町への別れを惜しみ、新市での新たな発展を誓い合った。

桜島町閉町
式

竹ノ下光町長が「町の名前が消えても、誇り高き大地『桜島』は永遠に残る。火山との共存を目指した先人たちの苦勞と郷土愛を受け継ぎ、新しい歴史とまちづくりへ、力を合わせてまい進しよう」とあいさつした。桜島中学校の生徒が「未来へのメッセージ」、桜洲・桜峰小学校児童20人が「過去&未来へ」のメッセージを発表、ビデオ上映で町の歩みを振り返ったあと、竹ノ下町長らの手で町旗が降ろされた。

また、桜島火の島太鼓の演奏、桜島音頭の踊りが披露され、最後は「蛍の光」を歌いながら、町に別れを告げた。式に先立ち、役場前で閉町記念碑の除幕式があり、また、国民宿舎「レインボー桜島」前で、桜島

の大正噴火90周年を記念する石碑も除幕された。

桜島自然
恐竜公園が
オープン

経済 城山自然公園に恐竜模型7体が設置された「桜島自然恐竜公園」が昭和59年7月22日オープンした。公園入口で行われた開園式では、桜洲緑の少年団がテープカットしオープンを祝った。訪れた子どもたちは、恐竜の体の中に入ったり、恐竜の前で写真を撮ったりした。とりわけ人気を集めたのが、高さ10㍎、体長19㍎の最も大きいディプロドクスで、胴体の中を空洞にし、胃の部分から背中へ抜け出し、尾を利用した滑り台が付いている。その後も、島内外の市民らの憩いの場として親しまれている。

新湯之平展
望所完成

火山噴火時の避難施設と観光のための展望所の機能を持った湯之平避難休憩施設が平成6年3月完成、29日に完成記念式典があった。施設は以前の展望所跡地に建てられた2階建てで、外観は町花の桜をイメージした5角形ガラス張りで、屋根

農産加工セ
ンター「桜
島旬彩館」
落成

の部分には日光の当たり具合によって色に変化する工夫が加えられるなど、きめ細かな気配りがなされた。桜島町の農業を通じた新しい情報発信の拠点「桜島旬彩館」が、平成7年4月1日にオープンした。国民宿舎隣の国道224号に挟まれた土地に、約1億4千万円の国庫補助や国からの借入を受けて、総事業費1億5900万円で建設された。町の特産品を加工する広いスペースの調理室、低温貯蔵室が設置され、多数の商品を置くことができる。



桜島自然恐竜公園

国民宿舎
「レインボー
桜島」・温
泉センター
「桜島マグマ
温泉」完成

道の駅「桜
島」と総合
交流ターミ
ナル「火の島
めぐみ館」が
完成

レインボー
ビーチ完成

桜島ウォーターフロント整備事業基本計画の一環として桜島ビクターセンター横に整備が進められてきた国民宿舎「レインボー桜島」と「桜島マグマ温泉」が完成し、平成12年4月25日にオープンした。宿泊施設（定員93人）、温泉施設を合わせた総事業費は16億4964万円で、一般財源のほか、厚生年金、国民年金積立還元融資などを活用して建設した。21世紀の観光桜島の目玉の一つとして期待された。

国道224号沿いの桜島旬彩館隣に整備が進められていた総合交流ターミナル「火の島めぐみ館」と道の駅「桜島」が完成し、平成12年8月28日にオープンした。町の発展と活性化を図るため、桜島の特長、素材を生かしながら、個性ある町づくりをするのが目的。両施設は鉄筋コンクリート造り（一部木造）で、延べ床面積は746・15平方メートル。総事業費は3億3097万円。施設には特産品売り場やレストラン、多目的交流室が設けられた。オープン後1年間で来館者が15万人を達成、島内外の利用者でにぎわっている。

国民宿舎レインボー桜島近くに整備していた人工海岸「レインボービーチ」が平成14年3月28日に完成、4月1日から利用が始まった。



道の駅「桜島」と「火の島めぐみ館」



レインボービーチ

町は人工ビーチの愛称を全国から募集、257人から396点の応募があった。なじみややすさが評価され「レインボービーチ」に決まった。ビーチはフェリーターミナルから近く、夏は海水浴、オフシーズンは散歩など、海に親しむ場になっている。

特産品で桜島をアピール

桜島の特産である小ミカンを使ったワイン製造に、町、商工会、農協、漁協で構成した町おこし事業研究委員会が成功、「桜島小みかんワインMUZE（ムゼ）」とネーミングされ、平成5年5月から販売が始まった。MUZEは鹿児島弁でかわいいを意味する「むぞか」とロゼワイン（赤ワインと白ワインの中間のピンク色をしたワイン）の「ロゼ」から取ったもので、公募の中から選ばれた。香料や着色料は一切使っていないのが特徴で、味は女性向けにあっさりしている。町制施行20周年式典の席上で発表された。

第1回世界一桜島大根コンテストが13年2月11日、桜島自然恐竜公園で開催され、町内外の親子連れら約800人の人出でにぎわった。このコンテストは、大きさや味の良さで知られる桜島ダイコンを名実ともに世界へアピールするとともに、生産者意識の向上・銘柄確立を図るのが目的。町内外から22農家と2小学校から、自慢のダイコン49点が出品された。県や農協などの職員9人が審査に当たり、重さ21・2^キの西白浜の大野学さんのダイコンが優勝した。大野さんの桜島ダイコンは、世界一の大きさを認めてもらうため、ギネスブックに登録申請された。また、ダイコンの白さや形を評価した「美人賞」や、胴回りの大きさを競う「胴回り賞」も選ばれ、2学校に「特別賞」が贈られた。

コンテストは毎年開催され、年々出品者数、入場者数も増えて桜島の名物イベントとして定着、合併後も継続して行われている。

13年6月17日には、第1回桜島町農林水産まつりが第3溶岩グラウンド隣のふれあい広場で開かれた。桜島の特産品をもっと知ってもらい、農業や漁業を通じて都市住民との交流を図るのが狙い。まつりでは、新鮮な野菜の即売や特産品売り場、フリーマーケットなど多くの店が勢ぞろい。鹿児島郡内の特産品売り場もあり、吉田町のコーナーでは町のイメージキャラクターの「よしだスタチャン」も愛嬌をふりまき、町内外から約2千人が会場を訪れ、終日にぎわった。例年秋に開催されている農村振興祭は、合併後も桜島地域ふさと秋祭りとして開催されている。

キャラクター
ターや曲で
桜島町イ
メージアッ
プ

県内外から募集していた桜島町のイメージキャラクター「マグマ21」が平成12年10月13日に決定した。応募総数679点の中から選ばれたのは、新潟県のグラフィックデザイナーの信貴正明さんの作品。21世紀に向け、町のイメージアップに活用された。

また、全国から募集していた桜島町のイメージソングが、13年7月に決定した。158曲の応募作品の中から選ばれたのは、東京都の学生、高橋宏樹さんの「Flying 2001 Island "sakurajima"」。また、同時に募集した「マグマ21」のテーマ曲は、兵庫県神戸市の松原雅子さんの作品が選ばれた。イメージソングは納涼観光船や火の島まつりのほか、行政無線でも流された。

桜島フェ
リーで利用
促進策

桜島フェリーの24時間運航が昭和59年4月1日からスタートした。これまで、桜島は「深夜の孤島」と言われていたが、これで解消された。緊急医療や野菜類をはじめとする農作物の早期出荷に寄与し、「いつでも行ける、いつでも乗れる」と、「海の国道」開業に町民の喜びもひとしおだった。

運航開始の初日、夜間第1便の出航に先立って、鹿児島・桜島両港で出発式。第6桜島丸が鹿児島港から

の第1便で、航海の安全を祈る神事を行った後、待ち構えていた車が次々と乗船し、たちまち満車となった。静かに岸壁を離れ第1便が桜島港へ向かった。

平成12年度からは新規事業として、桜島フェリーの自動車航送回数券を半額助成する「桜島町自動車航送料助成条例」が施行された。この制度は、町民の福祉の増進、利便性と定住を促進するとともに、地域間交流による町の活性化を図ることを目的につくられた。

桜島フェリー運航の
節目祝う

町民の生活航路である桜島フェリーが昭和59年で運航開始50周年を迎え、記念式典と祝賀会が5月26日、第8桜島丸船上で町民や関係者650人が出席して盛大に行われた。9年に国から2万円の融資を受け(当時の村税収入年間3万円)、地元部落船14隻を2万3千円で買収、木造渡船としてスタートして半世紀。薩摩半島と大隅半島を結ぶ架け橋として活躍してきた。式典の後、祝賀洋上パーティーが行われ、歌や踊りのアトラクションを楽しみながら、今後の発展を誓い合った。

平成7年1月27日には桜島町営フェリー創業60周年記念式典と第15桜島丸就航祝賀会が、町体育館で開催された。式典では、竹ノ下光町長が「24時間薩摩と大隅を結ぶ海のバイパスとして、公共輸送機関の責任と役割を果たしてきた。60周年の記念すべき年に就航したチェリークイーンが多目的イベント船として広く利用いただけることを願いたい。今後も安全運航に万全を期し、サービスの向上に努力したい」と決意を新たに示した。

桜島フェリーに相次ぎ
新船就航

23年間働いた桜島フェリーの第3桜島丸の代替船として建造が進められていた第13桜島丸が、平成4年2月15日に就航した。総トン数731ト、全長53㍎、幅13㍎、旅客定員は478人。大型バス10台(乗用車な

ら30台)積載できる。総工費は約7億6千万円。3階部分の前後に展望室と展望喫茶コーナーを設置したこ
とやテレビ付きの貴賓室を設けるなど、これまでのイメージを一新する豪華船が誕生した。

第15桜島丸「チェリークイーン」が就航したのは7年1月28日。昭和47年から22年間運航した第10桜島丸
の代替船として、長崎市内の造船所で建造した。全長56・10^{メートル}、幅13・5^{メートル}、1134^{トン}、旅客定員738
人、大型バス10台、乗用車64台搭載可能で、建造費は約9億4700万円。当時所有していた6隻のフェリー
の中では断トツの規模、設備を誇る。定期船のほか、洋上イベント船としての活躍も期待された。

第16桜島丸は11年2月4日に就航。昭和52年3月に就航し、22年間に渡り活躍した第6桜島丸の代替船と
して建造費約10億7100万円かけて建造されたもので、総トン数997^{トン}、全長54・02^{メートル}、幅13・4^{メートル}。
愛称は公募で選考した結果、「ドルフィンライナー」と決まった。

第18桜島丸「プリンセスマリン」は平成15年2月18日から運航を始めた。第8桜島丸の代替船で、建造費
は約10億4400万円。桜島フェリー初の交通バリアフリー法適合船で、1階から3階までのエレベーター
設置や3階客室には身障者用の座席27席、車いす収納スペース、身障者用トイレ、自動ドアを設けたほか、
2階車両甲板には2カ所のシルバー室を配置した。

温泉整備
着々と

社会 横山の町老人福祉センター前庭で、昭和58年10月から総工費約4千万円をかけて行っていた温泉掘
削工事は、当初計画の1千^{メートル}を完了、期待通り泉源に当たり、59年4月14日、待望の温泉が湧き出た。湯量
も豊富で、町では早速老人福祉センターと国民宿舎さくら荘に送るよう配管敷設工事にかかり、秋には
給湯が開始された。観光桜島の目玉として熱い期待が寄せられた。

湧き出た湯温は孔底で60・3度、地上で51・2度、湯量は毎分560リットル、1日約800トで当初計画の2倍以上にのぼった。老人福祉センターへ1日11ト、国民宿舎さくらじま荘へ1日45ト給湯された。

その後、平成7年1月に桜島ユースホステル敷地内で新たな泉源（湯量1日約605ト）が掘削されたため、老人福祉センターから切り替えられ、各施設へ給湯している。

一方、白浜のさくらじま白浜温泉センターは平成5年5月1日から営業を始めた。落成セレモニーでは、竹ノ下光町長が「温泉センターが町民の健康づくりの拠点となることを願い、町民をはじめ広く県内外の人にも利用してもらいたい」とあいさつした後、開栓ボタンを押すと、館内の全浴槽にお湯が給湯された。毎分200リットルを汲み上げ、湯量は豊富だ。露天風呂や気泡浴、寝湯、低周波浴、サウナのほか、家族連れには家族風呂が配置され、ゆったりと入浴できた。また、60歳以上の方や体の不自由な方々がゆっくり温泉を楽しめる福祉浴場も設けた。

高齢者福祉
向上へサー
ビスや施設
充実

町デイサービスセンターが平成3年12月2日開設され、事業がスタートした。在宅の虚弱老人等に対して通所や訪問によってサービスを提供する。老人の生活の手助け、社会的孤立の解消、心身機能の維持向上を行い、その家族の負担の軽減を目的に老人福祉センターに併設した。バスによる送迎、看護師による健康指導や健康チェック、入浴やレクリエーションなどのサービスを提供し、健康器具を使った簡単な機能回復訓



さくらじま白浜温泉センター

練や各家庭への配食サービスも受けられた。

特別養護老人ホーム「桜島苑」が7年5月1日に開所した。社会福祉法人桜岳会が国、県補助のほか、町が6千万円、三島・十島村がそれぞれ1750万円を負担して、総額約6億5千万円で建設した。

高齢化率が24%を超える町にとって、福祉対策は最も重要な施策の一つ。ホームヘルプサービス事業やデイサービス事業の利用率は全国ベスト10にも名を連ねる福祉先進町だが、さらに多様な福祉事業の拠点となることを期待して、町と関係機関が老人ホーム建設に取り組んだ。

場所は袴腰のユースホテルと京大火山観測所間の溶岩地帯で、約1万8千平方メートルが造成した。敷地内にはデイサービス棟も建てた。老人ホームには50人が入所できる。当初、町の30人、三島、十島の10人、鹿児島市郡、日置地区管内の10人のお年寄りが入所した。また、12人のショートステイを受け入れられる。また、認知症老人を夜間に一時預かるナイトケア事業もメニューに加えた。

火の島祭り
始まる

「火山と人との共存」をテーマに、昭和63年7月19日から23日まで鹿児島市で開催された鹿児島国際火山会議は、世界30カ国の研究者、行政、民間の延べ7600人が参加した画期的な会議だった。町では関連行事として、第1回「火の島祭り」を23日、町総合体育館で開催した。当初は溶岩グラウンドで行う計画だったが、雨のため急きよ



火の島祭り

体育館に変更された。ちびっ子のど自慢や歌謡ショーが繰り広げられたほか、伊豆大島の御神太鼓も応援に駆け付けた。また、創設された桜島火の島太鼓も登場、荘厳な太鼓の音を響かせ、会場を盛り上げた。祭りとは合併後も毎年開催され、島内外から大勢の来場者が詰めかけ、桜島の目玉イベントとして定着している。

克灰住宅51
戸完成

桜島の降灰禍と過疎からの脱却を目指し、町が昭和62年度から3カ年計画で、袴腰に計51戸の建設を進めていた克灰住宅が完成、平成2年4月から最終3期分の入居が始まった。4棟12戸の募集は1月から始まったが、環境や交通の便の良さ、広い間取り、格安の家賃が人気で1、2期分同様応募が殺到。町内や鹿児島市内をはじめ鹿屋、垂水、隼人などのほか、遠く東京、兵庫、大分からも応募があり、3・9倍（47件）の競争率となった。1、2期分の入居者135人と合わせ、克灰住宅の住人は175人となった。

クリーンセ
ンター稼働

平成2年度から建設を進めていた新しいごみ焼却場「桜島クリーンセンター」が完成、4年2月3日に安全祈願祭が行われた。昭和47年に建設された旧焼却場の処理能力は1日5トだったが、老朽化が目立ち、処理能力も低下して増大するごみに対応できなくなっていた。このため、4億9200万円の費用を投じて1日10ト焼却できる施設建設を進めてきた。新施設はすべて機械化が施された近代的なシステム。テスト操業を経て、4月から本格稼働した。

消防庁舎
「桜島町分
遣隊」が完
成

役場の敷地内に建設を進めていた「桜島町分遣隊」の消防庁舎が完成し、平成12年12月25日に落成式が行われた。24時間隊員が常駐する消防救急体制を整えるため、11年1月に鹿児島市と事務委託契約を結び、12年1月に鹿児島市消防局から隊長以下9人が配属され、救急業務の常備化が実現した。完成した庁舎には、消毒室など最新の設備を整備、救急車、ポンプ車、防災車の各1台が配備され、それぞれ桜島の火山れきか

らフロントガラスなどを守る防護ネットが付けられた。

教育・文化 桜島町民のスポーツの拠点となる町総合体育館が完成し、昭和61年4月26日に盛大な落成式が挙行された。総工費は約5億7千万円。バレーコート4面が取れ、大ステージも設置。2階観覧席は552人を収容できた。音響、照明等にも工夫が凝らされており、多目的な体育館となった。スポーツの場あるいは文化的催しの場として広い活用が期待された。

桜島町第二の体育館として建設されていた「勤労者体育センター」が完成、平成4年3月1日にオープンした。建設された場所は総合体育館隣りで、鉄筋コンクリート平屋建て。床面積は約1040平方メートルで、バレーコート2面、バドミントンコート6面が取れる。総事業費は1億7900万円。町と雇用促進事業団が共有する施設で、中小企業などに雇用されている勤労者の利用が優先だが、一般も利用できるようになった。勤労者体育センターは合併を機に、総合体育館の補助体育館に名称を変更した。

また、町福祉センターゲートボール場で建設が進められていた屋根付きゲートボール場が完成、6年3月26日に落成式が行われた。雨の日も灰が降る日でも天候を気にしないでゲートボールが楽しめるようにと、約7千万円を投じて鉄骨造りの上屋を設けたもので、ミニコート3面がとれる約1400平方メートルの広さがある。



桜島町総合体育館

II 行政機構の変遷

町長

第12代 横山 金盛（昭和50年4月27日～平成3年4月26日）

村議5期、副議長、議長など歴任。昭和50年に初当選以来、連続無投票で町長を務め、4期16年間町政を預かった。この間、財政立て直しと火山災害との闘いを指揮した。フェリー事業では合理化に伴う労働争議が起きたが、和解に努め、交通事業の近代化を図った。深刻な被害をもたらしていた桜島の降灰対策では、「避難施設整備法」の改正を関係大臣に直訴するなど、政治折衝に全力を挙げた。これが「火山対策特別措置法」の制定につながり、国営事業で防災農業のハウス菅農、河川改修、砂防ダムの治山治水事業ができるようになった。住民福祉、観光にも力を入れ、ランニング桜島、火の島祭りなどを企画、活力を生み出すとともに財政再建を果たした。平成4年春の叙勲で勲四等瑞宝章を受章。

第13、15代 竹ノ下 光（平成3年4月27日～7年4月26日・11年4月27日～16年10月31日）

横山町長の勇退に伴う16年ぶりの町長選挙で初当選を果たした。町船舶課長、観光課長、総務課長など歴任。第四次総合振興計画を踏まえ、「ひとが集まり」「ひとが住み」「ひとが憩い」「ひとが育つ」の4本柱の施策を推進。火山の島をアピールする「桜島マグプラン21」構想を打ち出し、白浜温泉や第14桜島丸、フェリーターミナル改修など立て続けに実現させた。また、お年寄りのデイサービスや特別養護老人ホーム、介護支援センター開設など福祉にも力を入れた。7年の町長選では竹山勇氏に敗れたが、11年4月の選挙で返

り咲いた。15年4月の町長選も勝利し、3選を果たした。同15年6月に県町村会会長に就任した。同16年の鹿児島市との合併まで町長を務めた。この間、農漁業基盤整備や観光振興に力を尽くした。合併後の11月の市議会議員増員選挙桜島選挙区で当選、20年4月に任期満了で引退。

第14代 竹山 勇（平成7年4月27日～11年4月26日）

竹ノ下氏との選挙戦に競り勝ち、1期4年間町政のかじ取りを担当した。町観光課長、総務課長、収入役など歴任。第四次総合振興計画（後期）をベースに、「福祉の充実」「産業の振興」「教育の振興」「観光の発展」を柱に21世紀を見据えた施策に取り組んだ。国直轄の砂防事業着手、町活性化対策審議会設置、桜島ウオーターフロント整備事業策定、町民の健康づくりの拠点である保健センターを建設、新しい農業のあり方を提示する桜島町農業振興対策審議会の発足など、幅広い分野で実績を残した。

助役

村脇 秀雄（昭和58年10月13日～平成7年4月26日）

松元 幹夫（平成7年6月23日～平成11年4月26日）

上山 秀一（平成11年7月1日～平成16年10月31日）

収入役

竹山 勇（昭和58年12月1日～平成2年12月31日）

平瀬 恍 (平成3年7月1日～平成7年6月30日)
図師 正明 (平成7年7月1日～平成11年4月26日)
村山 勝男 (平成11年7月1日～平成16年10月31日)

III 町議会

歴代議長

西元 芳弘 (昭和62年5月～平成3年4月)
竹田 穰 (平成3年5月～平成7年4月)
川添 慶三 (平成7年5月～平成15年4月)
武 正行 (平成15年5月～平成16年10月31日)

歴代副議長

岩元 藤保 (昭和62年5月～平成3年4月)
岡山 堅二 (平成3年5月～平成4年9月)
武 正行 (平成4年9月～平成7年4月)
浜平 純定 (平成7年5月～平成11年4月)
武 正行 (平成11年5月～平成15年4月)

山元 満（平成15年5月～平成16年10月）

町議会議員の選挙

	投票率	定数	立候補者数
平成3年4月21日	95・14%	18	20
平成7年4月23日	93・94%	18	20
平成11年4月25日	95・29%	16	18
平成15年4月27日	無投票	14	14

参考文献・資料 桜島町広報紙、南日本新聞記事

第三章 喜入町

鹿児島市の南部に位置し、錦江湾沿いに南北16^{キロ}、東西6・2^{キロ}と長細い地形を成している。昭和31年に町制を施行、44年には日本石油の喜入石油備蓄基地（現、JX日鉱日石石油基地喜入基地）が操業を開始した。原油タンクは日本の石油消費量の約2週間分に相当する735万^{キロリットル}の貯油能力があり、町のシンボリック的存在になっている。山間部には「喜入の森」（現在は鹿児島市観光農業公園グリーンファーム）、国道沿いには温泉を含めた道の駅「喜入」を整備し、町内外の利用者に親しまれてきた。

Ⅰ 地方自治の変遷

総合振興計
画を策定

政治 喜入町の第二次総合振興計画が策定され、平成2年4月からスタートした。向こう10カ年にわたり、「豊かで自然と調和した魅力ある町」づくりを目指した。昭和55年度に策定した第一次総合振興計画により各分野で着実な進展が図られてきたが、その後、高齢化の進行、高度情報化の進展、価値観の多様化など社会情勢の変化が進み、新しい発想と視点に立った施策の必要性に迫られていた。

第二次計画は三つの「町づくりの方向と施策」で構成された。一つ目は「自然と調和した活力ある町づくり」で、21世紀に向けて八幡川河口総合開発（マリニピア喜入）および、町有林を活用した喜入の森の整備を図るほか、地理的条件にあった収益性の高い園芸野菜等の生産団地化を推進。森林総合整備事業を進め、水産生産力を向上させる栽培漁業に取り組むとした。観光では喜入の森、八幡川河口の整備を挙げた。二つ目は「快

適で住みよい生活環境づくり」で、交通渋滞解消のため、国・県道の拡幅改良を促進するほか、集落内の道路を整備し、交通安全対策、消防・防災対策などの充実を図る。公害のない快適な環境づくりを目指し、積極的に公害防止対策を推進する。また、幼児から高齢者まで生涯を通じた健康づくりの推進を掲げた。三つ目は「豊かな知性と特性・体力を備えた人づくり」で、調和のとれた教育を推進するため、知・徳・体を備えた児童、生徒の育成を目指す。町民のニーズに応じた社会教育施設の整備に努めるほか、家庭と学校、地域社会との連携を深めた家庭教育の充実や、体育・レクリエーション施設の整備を促進し、指導体制の強化を図るなど掲げた。

第三次総合振興計画は、12年4月からスタートした。「ホットな人・海・山 ほっと新呼吸のまち」をスローガンに、基本理念として「自然のゆとりと街の魅力が共存する町」「21世紀のふるさと喜入」を掲げ、21年度までの10年間の目標とした

町ではこれまで第一次、第二次の総合振興計画を策定し、各分野で着実な推進と発展を図ってきたが、21世紀に向けて、さらに新しい発想・視点に立ったまちづくりを推進するため、第三次総合振興計画にさまざまな施策を盛り込んだ。基本構想の中で、将来目標として①田園のゆとりと都市の利便性を兼ね備えた生活のまち②南薩地域の観光・レジャーの玄関口となる交流のまち③地域に誇りを持ち、地域を創る人を育む文教のまち―を掲げ、22年の人口目標を1万5千人とした。

分野別の基本構想として、「都市基盤」は、街の魅力と自然の魅力が調和した生活空間の創造、「保健・医療・福祉」は、子どもから高齢者まで安心して暮らせる社会の構築、「産業」は、個性ある産業づくりと産業間で

の連携の促進、「教育文化」は、自ら考え、自ら行動する人と風土の創造、「行財政」は、町民と行政による協同社会の実現―を挙げ、前期（16年度までの5年間）計画の具体的な目標を掲げ、町政運営の基本とした。

重点プロジェクトには、自然と田園環境を生かした宅地・公園等の整備や生涯学習、文化・スポーツ活動拠点の整備充実、喜入新港周辺の開発・整備、農産物等の販売拠点の整備、南部地域活性化のため生見海水浴場の整備・拡充など挙げた。

町制施行40周年

平成8年10月に町制施行40周年を迎え、町発展に寄与した町民を生涯学習町民大会で表彰した。また、記念として「いきいきふるさとづくり助成金」を各集落に交付した。また、40周年を祝うため同年11月2日に喜入音頭の記念碑を八幡温泉保養館の南側敷地内に建立。除幕式では作曲の島津伸男さん（前之浜出身）、公募で選ばれた作詞の大保ふさ子さんも出席して、町の新たなシンボル誕生を祝った。町民に親しまれ、歌に踊りに利用されている「喜入音頭」は、昭和44年にレコード盤として制作され、当初約1千枚作ったが、ほとんど残っていないかった。CDが普及してきたため、1千枚を新たに制作、一般向けにも販売された。

与那城町と
姉妹都市盟
約15周年記
念式典

喜入町と沖縄県与那城町との姉妹都市盟約15周年を祝う記念式典と交流会が平成16年5月23日、八幡温泉保養館で開かれた。両町は大規模原油基地所在地としての縁で、昭和63年8月6日に姉妹都市盟約を締結以降、青少年、役場職員をはじめ各種団体などの交流を実施し、平成10年8月29日には10周年記念式典・交流会を与那城町で開催した。この間1千人を超える人的交流が行われてきた。しかし、両町それぞれ合併に向けての協議や手続きが進められており、喜入町、与那城町という自治体の名のもとに交流事業が行われるのは、このときが最後となった。合併後は新たな発想のもとに民間の自主的交流を促進し、末永い友好の絆

町の事業や
施策が全国
で評価

を深めていくことを両町で確認し、署名した。与那城町は合併でうるま市となったが、合併後も数年に1回程度、旧町職員の相互訪問が続いている。

平成4年2月20日に開かれた鹿児島県町村会の定期総会で、町が全国町村会より優良町村として表彰され、その伝達式が行われた。

これは、「豊かで自然と調和した活力ある町づくり」に取り組んだ事業実績（農林業の構造改善事業、漁港整備、し尿・じん芥処理場、各学校施設および公民館、総合運動公園等建設）をはじめ企業誘致、さらに「喜入の森」の建設推進など、町民生活に密着した町政推進が評価され、表彰に至った。

また、町は11年度の優良情報化団体自治大臣表彰（行政情報化部門）を受賞、12年1月14日、東京都の麹町会館で授賞式があり、日高保町長が自治大臣から表彰状と盾を受け取った。町は9年度からパソコンや通信ネットワークを利用した情報処理化（職員コミュニケーションシステム）を推進し、行政事務の効率化及び町民への情報提供を図ってきたことが評価された。

青少年海外派遣事業が平成8年にスタート。初年度は7月22日から高校生6人を10日間、オーストラリアのロックハンプトン市へ派

青少年海外
派遣事業



青少年海外派遣事業

遣した。生徒らはホームステイや語学研修など行いながら、たくさんの異文化に触れるとともに、幅広い視野と国際感覚を身につけた。生徒らは帰国後、町広報誌に寄稿し、体験を綴った。この事業はオーストラリアへの青少年派遣事業に取り組んでいた指宿市、開聞町との共同事業として実施した。16年まで毎年6人の中高校生を派遣した。

喜入町閉町式及び合併記念碑除幕式

合併に伴う喜入町閉町式が、平成16年10月16日に町総合体育館で行われた。式には、町議会議員や各地区公民館長および集落長・農業委員・民生委員をはじめとして、各種団体の長ら約350人が参列し、日高保町長が「喜入の良さを生かしつつ、住民が一体となって新しく生まれ変わる新鹿兒島市の一員として、希望を持って力強い第一歩を踏み出してくれることを心から期待したい」と式辞を述べた。

来賓あいさつの後、喜入中学校生徒の意見発表、指宿高校吹奏楽部の「喜入音頭」の演奏に続き、4人の小学校児童が町旗を掲げて入場、きれいに折りたたみ、日高町長に手渡し、増永力夫議長が収納した。舞台では「ありがとう喜入町」の横断幕が掲げられ、厳かに式を終えた。

一方、閉町式に先立ち、喜入新港ふれあい広場内に建てられた合併記念碑の除幕式が行われた。喜入の輝く未来を願い、記念碑の中央には「喜び入る」象徴としての卵、また6地区の希望を秘めた卵があり、その周りに6地区をイメージした6人の12の瞳が、この「希望の卵」と喜入の「輝く未来」を見据える姿を表した。この記念碑が名実ともに、自然とゆとりの街の魅力が共存する「21世紀のふるさと喜入」にふさわしいシンボルとなることが期待された。

「喜入の森」
キャンプ場
がオープン

経済

町民の大きな夢であり希望であった「喜入の森」キャンプ場が完成し、平成4年7月1日にオープンした。この施設は、多目的保安林総合整備事業と森林総合利用促進事業として整備され、国・県の補助を受け、元年度から町有林約54筋を総額1億2605万円かけ整備した。完成したキャンプ場はバンガロー平屋建て14平方メートル（大人5人用）が7棟、同2階建て34平方メートル（大人10人用）が3棟、テントサイト、共同炊事棟、水洗トイレなどがあり、最大収容人員は大人140人が宿泊できる。また、林間広場、林間歩道、水遊び場、薬草園も設けられ、森林浴が十分楽しめるように工夫された。

また、キャンプ場の管理棟が7年3月10日に完成、4月1日にオープンした。この施設は木造平屋建て床面積200平方メートルで、構造材に大断面集成材を用いて森林景観との調和を図った。森林レクリエーションの拠点、憩いの場として活用された。現在はグリーンファームキャンプ場として利用されている。

社会

総合レジャー施設・マリニア喜入を整備

ふるさと創生事業の一環として、八幡川河口、国道沿いの一角で進めていた温泉掘削に平成2年2月に成功、町は温泉を中核施設として総合レジャー施設「喜入町マリニア喜入施設」を整備することになった。町民待望の温泉保養施設「喜入八幡温泉保養館」が完成し、4年11月14日に落成式典と祝賀会があり、翌日からオープンした。祝賀会では中名小児童による喜入太鼓や生活改善グループの寸劇、町内の舞踊グルー



「喜入の森」キャンプ場

プの踊りなどがあり、完成を祝った。鉄筋コンクリート2階建てで、浴場のほか182畳の休憩室やマッサージ室、会議室、売店、レストランなど設け、家族連れ、職場での会食や各種会合などにも活用された。

温泉保養館に続くマリンピア喜入事業の第2段階として4年10月から建設を進めていた「喜入町室内温水プール」が完成し、5年10月7日に落成式典と祝賀会が開かれ、翌日にオープンした。式典に先立ち行われた町長、議長らのテープカットの後、こけら落としとして国立鹿屋体育大学教授でミュンヘンオリンピック金メダリストの田口信教さんと同大学の学生4人が模範泳法を披露した。また、喜入小6年生61人も初泳ぎをして、完成を祝った。室内温水プールは鉄骨造平屋建て、延べ床面積2083・53平方メートルで、競技用25メートルコース、変形プール・ウォータースライダーなど備わっており、喜入八幡温泉保養館へも渡り廊下で結ばれた。

6年4月にはマリンピア喜入が、建設省（当時）の「道の駅喜入」として登録された。鹿児島県では第1号で、同施設は1日に約1万5千台の車が通行する国道226号沿いにあり、ドライバーが立ち寄り休憩したり、観光案内の情報を得られる拠点として利用されているのが評価された。

さらに、マリンピア喜入事業の一環として工事が進められてきた多目的広場が、八幡温泉保養館と室内温水プールの北側に完成したのは、6年5月12日。こけら落としとしてオープン記念ゲートボール大会が行わ



マリンピア喜入

れた。

また、道の駅喜入に8年5月4日、青空市が開設され、多くの人出でにぎわった。消費者のニーズに合った有機栽培に取り組む農家の振興と、マリンピア内にある温泉保養館の活性化を図るのが目的で、青空市では、中名施設園芸組合の農家が有機栽培したフカネギ、レタス、サトイモ、トマト、実エンドウなどの野菜類のほか、カサブランカ、マリーゴールドなどの花も販売され、訪れた人々の人気を集めた。毎月第3日曜日を「マリンピア青空市」の日に定め、定期的に開催された。

町は平成8年10月1日から老人給食サービス事業を始めた。65歳以上の1人暮らしや体の不自由なお年寄り夫婦など、自分で食事の準備をするのが困難な人にバランスのとれた食事を届けて、健康増進や孤独感の解消を図ろうというのが狙い。事業は町社会福祉協議会に委託した。

老人給食サービスセンター前で関係者多数が出席してオープニングセレモニーが行われた後、日高保町長、今別府健司助役、丸岡虎夫社会福祉協議会会長が3台の配送車に分乗して昼食を宅配した。給食サービスは1食300円で、毎週月曜日から土曜日まで（日曜、年末年始と8月15日は休み）給食センターで調理した給食が昼食時と夕食時に届けられる。同年度の総事業費は3150万円で、うち約650万円が給食センター建設に充てられたほか、町社協への事業委託料約530万円、備品購入費など920万円が予算計上された。養護老人ホーム「喜入園」の移転改築工事は9年2月28日に終了、3月5日落成式があった。昭和42年度に建設された同園は約29年が経過し老朽化したため、喜入地区宮坂神社隣への移転改築工事が行われた。建物は鉄筋コンクリート造平屋建て、建築面積は2477平方メートルで、旧ホームの約2倍の広さ。総事業費は国

高齢者福祉、着々と充実

や県補助金、新エネルギー・産業技術総合開発機構（NEDO）負担金など入れて10億6千万円。1人部屋42室、2人部屋4室、シヨートステイ用4室の合計50室。全館冷暖房完備で、床の段差をなくすなど、お年寄りに配慮した設計になった。他にリハビリ室、理容室、談話コーナーや文化的な催しも開ける食堂兼ホール、ゲートボールなどができる広場も設置した。

注目されたのが、防災型の太陽光発電システムの導入で、太陽光を利用した発電量は最大50キロワットあり、施設で消費される電力の3分の2ほどをまかなう計画。太陽光発電システムは、太陽光発電フィールドテスト事業を通して、NEDOの補助金並びに技術協力で設置した。地球規模の環境問題や資源問題に町が先駆的な役割を果たす狙いもある。また、地域防災施設としても活用できるよう、台風などの災害時には地域住民の避難所としての機能も持たせた。

八幡温泉保養館の温泉を利用して、在宅の寝たきりなどの高齢者に入浴サービスを行う訪問移動入浴サービス車の出発式が9年4月1日、老人憩いの家であった。出発式には約80人が出席。日高保町長が「入浴車の安全と事業の成果を願うとともに、寄贈して頂いたテレビ局に感謝します」とあいさつした。テープカットの後、第1号のサービスを受けた利用者は「久しぶりに湯舟に浸かれてとてもうれしい」と感謝していた。喜入町の第1回合同金婚式が平成元年11月22日、総合体育館で行われ、136組の夫婦が出席して結婚50年を盛大に祝った。合同金婚式は、50年以上にわたり夫婦が協力して国づくり、まちづくりに尽力したことに対する感謝と、これからも夫婦仲良く幸せに暮らしてもらいたいとの願いから、11月22日（いいふうふ）に設定された。その後、毎年開催され、合併時の16年度で終了した。

合同金婚式
（夫婦結婚
50周年）開
催

ひとり喜寿
祝賀会開催

第1回ひとり喜寿祝賀会が平成9年7月7日、喜入八幡温泉保養館で開催された。町が町内に住む1人暮らしのお年寄りで、この年に喜寿を迎える方々を招待し、これまでの苦勞や努力に対し敬意を表し勞をねぎらおうと、初めて企画した。7月7日は77歳の喜寿にちなんだ。祝賀会には対象者48人のうち27人が出席した。合同金婚式と同様、16年度まで開催された。

クリーンセ
ンター完成

町クリーンセンター（ごみ処理場）が中名に完成、平成2年4月2日に落成式を行い、10日から稼働した。5億8千万円余りをかけ建設した。燃えるごみは焼却により衛生的に処理し、燃えないごみは金属、ガラス類に選別して、再利用できるものは資源化し、その他は埋め立て処分を行うようになった。その後、施設の老朽化と機能の低下、さらにダイオキシンの公害防止対策を図るため12年から13年にかけて、排ガス高度処理施設工事を行った。

保健セン
ターが完成

平成6年8月から建設していた保健センターが7年2月28日に完成し、4月1日にオープンした。保健センターは町民の健康づくりを推進する施設として、また町民の自主的な保健活動の場として利用してもらうのが目的。センターは鉄筋平屋建てで面積は719・9平方メートル。健康相談室や母子指導室、集団指導室、機能回復訓練室、調理実習室、診察・検査室など設けた。

町では病気の早期発見や予防のための乳幼児・産婦検診、歯科検診、健康教育・相談・指導など、健康づくり事業を推進しており、保健センターが健康づくりの拠点として積極的な活用が期待された。

シルバー人
材センター
設立

喜入町シルバー人材センターが平成12年2月1日に設立、4月1日から旧学校給食センター施設に事務所を置き、事業を開始した。シルバー人材センターは、定年退職者などが地域社会の日常生活に密着した臨時

的または短期的な仕事を通じて、長年の経験や技能を生かして収入を得るとともに、自らの生きがいの充実を得るのが目的で、働く意欲のある高齢者（おおむね60歳以上）が会員となる団体。公園清掃や樹木消毒、植木せん定、左官、和洋裁、経理事務などの仕事を請け負った。

指宿広域火葬場の建設

指宿広域市町村圏組合（指宿市・喜入町）による火葬場建設工事の安全祈願祭が平成13年7月4日、指宿市十二町で行われた。火葬場は12年度に基本設計及び実施設計を完了。13年度に工事費約4億7千万円をかけて着工し、14年3月31日に指宿・喜入火葬場「天翔の里」として竣工した。純和風の鉄筋コンクリート2階建て、延べ床面積は約1千平方メートルで、1階に火葬炉3基、収骨室2室と告別室があり、2階にはロビー、和室3室、庭園風のバルコニーを配置。建物外観は煙突の見えない構造で、周囲の落ち着いた自然景観にマッチするよう工夫された。

初めての町総合防災訓練を開催

喜入町初めての総合防災訓練が平成14年9月1日の防災の日、前之浜地区で開催された。この訓練は、災害対策基本法及び町地域防災計画に基づき、大規模災害時に防災関係機関及び住民が相互に緊密な連携を保ちながら、情報伝達、救出救助・避難誘導・消火等の災害応急対策が迅速かつ効果的に行われるように防災対策の確立を図るとともに、町民の防災意識の高揚を図ることを目的に開催された。

訓練想定は、種子島近海を震源とする強い地震が発生し、薩摩半島と大隅半島で震度6強が観測され、前之浜地区をはじめ町内各地で被害が発生したというもの。午前9時のサイレン吹鳴に始まり、前之浜小学校に現地対策本部の設置、避難所への移動、車両事故救出、救急隊による負傷者の応急処置、バケツリレーによる初期消火など、各機関一体となって、きびきびした動きで訓練を披露した。

前之浜わい
わい市オー
ブン

学校給食セ
ンターが新
築移転

前之浜地区の国道沿いに、農産物販売所「わいわい市前之浜館」が平成13年11月17日オープンした。第三次総合振興計画に基づき、地元民で組織する前之浜地区わいわい市委員会が、町補助金500万円を受け建設した。地元民で作った農産物の他に切り花や農産物を利用した加工品なども販売した。

教育・文化 老朽化に伴う新築工事が行われていた町学校給食センターが旧麓集落に完成し、平成12年3月30日に落成式が行われた。落成式では町や学校関係者ら70人が出席してテープカットなどが行われ、最新設備を備えたセンターの完成を祝った。

II 行政機構の変遷

町長

第12代 釜付 健二郎（昭和50年4月～平成7年4月26日）

農業委員、町議、農協常務、助役を経て、昭和50年4月立候補して町長初当選。以後、5期20年間町長を務めた。「喜入は『喜びが入る』。この町名こそ努力目標。名実ともに物も心も豊かな町づくりを目指す」をモットーに、地区公民館の建設など社会教育の振興、休遊林を活用した「喜入の森」の整備、ゴルフ場誘致のほか、大型の温泉保養館建設も手掛け、町勢浮揚に努めた。県市町村自治会館管理組合長、県水道協会長なども歴任した。平成7年には名誉町民の称号、8年には勲四等旭日小綬章も贈られた。

第13代 日高 保（平成7年4月27日～16年10月31日）

法政大二部中退。町税務課長、収入役、助役を経て釜付町政の後継者として立候補、激戦を制して初当選

した。11年4月、15年4月の選挙では無投票で当選、町長を3期務めた。町の振興計画を土台に都市近郊型農業の推進や文教の町づくりにまい進。また、養護老人ホーム「喜入園」の新築移転や訪問移動入浴サービス事業など福祉にも力を入れたほか、マリンピア青空市場や瀬々串朝市わいわい広場を開設するなど、地域活性化にも尽力した。

助役

日高 保（昭和62年9月 ～平成6年12月31日）

今別府 健司（平成7年6月28日～平成16年10月31日）

収入役

北 重雄（昭和62年10月 ～平成7年4月26日）

前畑 重信（平成7年6月28日～平成16年10月31日）

III 町議会

歴代議長

尾上 栄吉（昭和62年5月～平成元年4月）

内菌 國武（平成元年5月～平成3年4月）

生見 詮治 (平成3年5月～平成7年4月)
内木場重記 (平成7年5月～平成13年4月)
増永 力夫 (平成13年5月～平成16年10月31日)

歴代副議長

内菌 國武 (昭和62年5月～平成元年4月)
牧菌 三男 (平成元年5月～平成3年4月)
内木場重記 (平成3年5月～平成5年5月)
樋高 清治 (平成5年5月～平成7年4月)
増永 力夫 (平成7年5月～平成11年4月)
樋高 清治 (平成11年5月～平成13年5月)
浜田 道治 (平成13年5月～平成15年4月)
仮屋 洋一 (平成15年5月～平成16年10月)

町議会議員の選挙

平成3年4月21日	投票率	定数	立候補者数
平成7年4月23日	無投票	20	20
平成11年4月25日	88・77%	20	24
平成15年4月27日	無投票	18	18

参考文献・資料 喜入町広報紙、喜入町郷土誌、南日本新聞記事

第四章 松元町

鹿児島市の西部に位置し、ほぼ三角形の地形を成している。昭和35年4月1日、村制を発展的に廃止し町制を施行した。豊かな土壌と気象条件に恵まれ、昔から松元茶の産地として知られ、各品評会でも上位を独占してきた。茶普及のため、さまざまな施設を整備し茶所をアピールした。平成10年3月には南九州西回り自動車道松元インターチェンジ（IC）の供用が始まり、鹿児島市をはじめ各地へのアクセスが向上した。また、平野岡健康づくり公園の整備が進み、社会体育を楽しむ環境整備も図った。

1 地方自治の変遷

総合振興計
画を策定

政治 第三次松元町総合振興計画の基本構想が平成2年3月定例議会で議決され、2年度から11年度までの向こう10年間の町の基本方針が決定した。将来人口については、自然増、社会増、開発付加増の予想から検討を加え、基本構想最終年度を1万4千人と想定した。21世紀への橋渡しの時期となるこの10年間で、「自立ある町勢の発展につなげる」期間と位置づけ、五つのテーマに基づいて、創造性を発揮してまちづくりに取り組みとした。

構想の策定にあたっては、町を取り巻く内外環境の変化、とりわけ、広域都市圏化問題や高速交通化、環境問題を始め、住民の高齢化や個性化に伴う価値観の多様化を積極的に受け止める姿勢で検討された。

一つ目のテーマは「特徴を生かした个性的なまちづくり」で、地理的距離や日常生活圏では鹿児島市に向

いており、河川流域と行政面では日置郡に向いているという二面性が本町の特徴と位置づけ、都市化の波に埋没させない姿勢で、まちづくりに取り組むとした。二つ目は「隣りのまちと調和したまちづくり」で、都市的空間としての森林地域を活用したレクリエーションゾーンなど隣りまちと機能分担できるまちづくりを進めることを挙げた。三つ目は「住み良い社会基盤のまちづくり」で、生活施設の整備充実と住居環境の改善を図るとともに、コミュニティの再編育成により、地域基盤の強固なまちづくりに努めるとした。四つ目の「人々の創造を生かした文化のまちづくり」では、心豊かで潤いに満ちた生活の実現と郷土の芸術文化の向上をうたった。五つ目は「にぎわいのあるまちづくり」で、産業を興し、都市機能を充実させ、豊かな町の建設を進めるため、限られた土地の有効利用を図る。具体的には水利用型農業への転換、製造業の企業誘致、多機能型ショッピングセンターの導入などを推進するとした。

第三次総合振興計画の前期計画を引き継ぎ、7年4月、自然と社会環境の調和したまちづくりのための第三次後期計画を策定した。この計画は7年度から11年度までの5年間に町が取り組む行政方針を明らかにした。計画では目標年次である11年度の人口を現在より約2千人多い1万3千人と定め、また土地利用方針を想定しながら、6項目の町づくり課題を定め、それぞれに整備方針を明確にした。

第1章「交通・情報機能を高め地域の発展をめざす」では、南九州回り自動車道松元ICの設置実現と早期供用開始を軸に、町道には緊急地方道及び地方特定道路整備事業の導入、県道では主要地方道鹿児島東市来線等の早期改良促進を掲げた。第2章は「創意と工夫の活力ある産業振興をめざす」で、県営かんがい排水事業と畑総事業の推進、中山間地域総合整備事業等による水田基盤整備、農村総合整備事業による農道・

水路等の整備（農業）、工業団地の造成と優良事業所の誘致、工業団地パンフレット作成と企業誘致の会社訪問（工業）、経営研究と共同店舗方式など自助努力の促進、商業活性化イベントの実施（商業）など網羅した。第3章は「安全で住みよい快適住環境の整備をめざす」で、県住宅供給公社・松栄台土地区画整理事業の推進、安定給水のための水源確保、小型合併処理浄化槽設備の普及促進、町防災計画の見直し実施など挙げた。第4章は「生き生き健康福祉施策の充実をめざす」で、高齢者福祉のため、デイサービス・介護支援センターの建設や在宅寝たきり老人介護手当の増額を目指し、障害者福祉では雇用促進、ホームヘルパーの派遣や相談業務の充実、児童福祉では、保育所入所保護者負担金の軽減など推進するとした。第5章は「人間性豊かな教育文化の町をめざす」で、町立幼稚園の園庭拡張と園舎の増設、スクールバスの増車、保健室等の冷暖房設備、町民一人一スポーツ運動の実施など掲げた。第6章の「効率的な行財政の運営をめざす」では、行政改革推進本部と推進委員会の設置、健全財政運営の徹底に力を入れるほか、生涯学習自主活動グループの育成、人材育成海外等派遣事業の充実、地域の伝統の傳承や史跡公共物の保存など、多面的な目標を挙げた。

第四次総合振興計画を策定したのは、12年3月。地方分権社会、少子高齢化社会、情報化社会などへの対応を推進するための指針で、計画期間は21年度を目標とし、前期は16年度とした。「ひと・くらし・自然の調和したまち」を基本理念として、「みどりと心のオアシスマつもと」の将来像実現に向かって、将来フレーム、土地利用計画など基本構想を描いた。

基本計画として、第1章は「個性をはぐくみ豊かな人のまち」を掲げ、幼児や学校教育の充実、国際交

流推進のほか、平野岡健康づくり公園の利用促進を通して、町民の健康増進を図るとした。第2章の「安心して暮らせる環境のまち」では防災行政無線増設による防災意識の高揚、消防施設・設備の整備、交通安全対策の充実に加え、廃棄物リサイクルの推進、県道・農道の整備、快速電車の運行も求めるとした。第3章は「活力ある産業のまち」。茶業振興のため、優良品種への改植と生産組織の充実、森林整備のほか、四元工業団地への企業誘致の推進や自然・文化とふれあう観光推進をうたった。第4章の「すこやかで人にやさしいまち」では、保健センターの機能強化、国民健康保険の被保険者の実態把握など通じ、保健医療体制の充実を掲げたのに加え、児童・母子・寡婦等・高齢者福祉の充実も挙げた。第5章「みんなでつくる明るいまち」では、機能的で効率的な行政運営の推進と町税徴収率向上など財源確保など強調した。また、男女共同参画の環境づくりや地域公民館活動の活性化も図ることにした。

松元町都市計画マスタープラン
策定

第四次総合振興計画後、社会状況や経済システムの変化など町を取り巻く環境変化への対応が急務となる一方、地方分権の流れにも対応するため、松元町都市計画マスタープランを平成15年3月、策定した。計画は第四次総合振興計画でうたった「みどりと心のオアシスマつもと」の将来像を実現するため、个性的で快適な都市づくりの基本方針となるもので、目標年次を概ね20年後の33年とした。

まちづくりの目標として、「個性をはぐくみ 心豊かな人のまちづくり」「安心して暮らせる環境のまちづくり」「活力ある産業のまちづくり」「すこやかで人にやさしいまちづくり」「みんなでつくる明るいまちづくり」の5項目を掲げた。この目標を実現するため、商店街の魅力的な景観づくりや、人と環境に優しい道路の整備、都市防災に配慮した住宅供給施策を推進、農業の生産基盤である農地の保存・活用に努めるなど

の方針を挙げた。

また、地域別の構想も打ち出し、松元地域にはまちの顔としてにぎわいと活力ある空間形成、東昌地域には農地と人とのバランスのとれた心地よい地域づくり、春山地域には自然と調和し、活力あふれる地域づくり、石谷地域には歴史と文化香る特色ある地域づくり、という整備の方向性を示した。

国土利用計
画「松元町
計画」策定

国土利用計画「松元町計画」が平成3年3月議会で議決され、中間年次を7年、目標年次を12年に設定して国土（町土）利用の基本方針が決定された。この計画は、町土が現在及び将来における町民の限られた資源であるとともに、生活及び生産を通じる諸活動の共有の基盤であるとうたう基本認識のうえにたつて、公共の福祉を優先させ、自然環境の保全を図りつつ、長期にわたって安定した均衡ある町土の利用を確保することを目的に策定された。町総合振興計画構想に即して定めた。

行政改革大
綱を策定

町は行政全般にわたる組織機構等の再点検を行うため、平成12年3月に新たな行政改革大綱を策定した。計画期間は11年度―15年度までの5年間とした。7年度に行政改革大綱を策定し、取り組みを進めてきたが、21世紀の到来を目前に控え、行政の体質整備が必要となっていた。

項目別の主な方針を次のように設定した。事務事業見直しについては、施設の運営、管理の民間活力の導入や補助金廃止・統合を進める。組織・機構の見直しについては、課・係再編を進め、効率的な行政サービス提供を図る。定員管理と給与の適正化については、新規事務事業への職員配置や民間委託・電算化等を積極的に推進することなど挙げた。職員の能力開発及び人材育成促進については、専門研修や自己啓発等の研修を計画的に実施、行政の情報化の推進については、電算の高度利用と情報システムの構築化に取り組みと

した。

また、公正の確保と透明性の向上については、条例に基づく行政手続きの適正化に努めるとともに、情報公開の取り組みを進め、それに対応するための文書管理体制の整備を図る。経費の節減合理化等による健全な財政運営の推進については、経常的経費の性質ごとの検討を進め、具体的な推進計画に基づき経費節減の取り組みを進める。庁舎・会館等公共施設の有効利用と管理の合理化については、施設間の運営、管理等の連携を充実、強化し、利用の効率化を図ることなど盛り込んだ。

町制施行を
祝う

町制施行30周年記念式典が平成2年4月7日、中央公民館であり、表彰や記念講演などが行われた。松元町は昭和35年に上伊集院村から町となり、当時約8500人だった人口は一時期減少したものの、鹿児島都市圏としての影響で仁田尾、折尾地区を中心に団地化が進み、増加傾向に転じ、1万人を超えるところまでになった。

式典は力強い松元太鼓でオープニング、町民歌斉唱のあと、四元泰盛町長が「今後21世紀に向けて、松元ダムの早期着工や南九州西回り道松元ICの設置、県道鹿児島東市来線の整備、温泉センター建設など課題は多いが、町民の理解を得ながら全力で取り組みます」と式辞を述べた。町発展に功績のあった17人と5団体に感謝状や表彰状が贈られた。

町制施行40周年を祝う記念式典が開かれたのは、12年4月27日。会場の中央公民館に町内外から約300人が出席した。人口は1万2千人を超え、鹿児島市のベッドタウンとして着実に発展してきた。式典ではこれまでの地方自治をはじめ各分野で町発展に尽力された8人が特別表彰を受けた。

日置広域連
合設立

日置郡内7町（金峰町を除く）は平成11年6月1日、日置広域連合を設立し、伊集院町妙円寺に置かれた事務局に看板が設置された。先立つ5月17日に、鹿児島県知事から県内初の広域連合設立許可証が交付された。同連合は12年4月に介護保険制度がスタートすることに伴い設置されたもので、複数の自治体が連携して要介護認定申請に伴う訪問調査や介護認定審査会の運営などを行った。

初代連合長に宮路高光伊集院町長を選出。事務局には各町から派遣された8人の職員が常駐し、同年10月から始まる要介護認定事務（訪問調査、介護認定審査会の設置や運営、認定）に従事した。

地籍調査事
業完了

松元町が進めてきた地籍調査事業が14年間で終わり、昭和61年11月6日、中央公民館で完了式が行われた。地籍調査事業は「国土の高度利用と地籍の明確化を図る」目的で制定された。国土調査法に基づいて、47年度から着手していたもので、14年の年月と1億5036万円の経費をかけて、60年度に終了した。地籍調査事業は、土地基盤整備事業等の土地行政はもとより、個人の大切な財産の維持、管理のうえからも重要な成果をあげた。

具体的には上谷口の一部、4・84平方キを初年度に、年次計画で事業が進められ、60年度までに町の総面積51・24平方キ、3万3244筆の地籍調査事業を完了した。調査前より筆数が1万36減ったが、これは合筆や畑等が減ったことによるもの。逆に山林の筆数が大幅に増えた。それに伴って、面積も増減を示した。筆界未定が1521ヶあるが、これは、当事者間で決定する問題とした。

今後は、この成果をもとに個人の財産管理や地籍の明確化、課税その他の負担の公平化が図られ、各種事業の計画や住民サービス等に幅広く活用できると期待された。

役場新庁舎、保健センター完成

町役場新庁舎が完成、昭和62年3月9日に開庁式が行われ、業務を開始した。新庁舎は旧役場前の県道を挟んだ南側に61年4月に着工。敷地9724平方メートル、鉄筋コンクリート3階建てで延べ床面積3406・34平方メートル。1階に税務、住民、経済の各課、農業委員会事務局、電算室、会議室、2階に町長室、助役室、総務、企画、建設の各課、教育委員会事務局、教育長室、庁議室、3階に議場や正副議長室、委員会室、1000人収容の大会議室を設けた。住民サービスの拠点としての機能を十分発揮できる施設となった。

工事費は庁舎本体が4億2千万円、ほかに空調設備や電気、給排水衛生設備などが合わせて約2億円。外壁は茶色系のタイル張り、玄関部分は3階までベランダ風にせり出し、重厚で落ち着いた外観に仕上げた。新庁舎と並んで町保健センター（鉄筋2階建てで延べ床面積507平方メートル、総事業費6592万円）も完成した。

町人口1万人を突破

町の人口が昭和63年12月28日、待望の1万人を突破した。松元町の人口は昭和20年、上伊集院村当時の国勢調査で1万人を超え、1万86人となったのがピークで、その後減り続け、50年には7211人まで減少した。その後、町内各地で小規模団地の開発が進み、人口は徐々に増加に転じ、60年国勢調査では5年間で10・2割増え、県内第4位の伸びを示していた。



松元町役場庁舎

青少年英国
派遣事業開
始

町内の子どもたちを対象に平成9年から青少年英国派遣事業を始めた。郷土が生んだ偉人町田久成の足跡を訪ね、ホームステイしながら英語学習や交流活動を通して国際感覚を養ってもらおうとの狙い。1回目は町内に居住する中学生6人、高校生4人の10人が代表に選ばれ、友好使節団として7月25日から8月11日まで海外生活体験をした。

町田久成は幕末に薩摩藩英国留学生としてイギリスに留学。維新後は新政府・内務省などに身を置き、博物館の創設や文化財保護に尽力し、東京上野の国立博物館（現在の東京国立博物館）の初代館長に就任するなど、輝かしい足跡を残した。

子どもたちは英国滞在中、町田が学んだロンドン大学を表敬訪問したり、大学構内に設置された留学生の石碑を見学し、先人の功績を肌身で感じた。ホームステイ先のサウサンプトンでは、ホスト先の家庭に溶け込み、交流を深めた。留学事業は16年まで毎年実施され、計80人の中高校生が派遣された。

松元町閉町
式を開催

松元町閉町式が平成16年10月29日中央公民館で行われ、大勢の町民らが参列した。合併経過報告のあと、町政功労者として、地方自治部門の吉満光男さん、吉富進さん、池田義光さん、上四元市熊さん、東幸雄さん、教育文化部門の上野清香さん、社会福祉部門の四元盛隆さん、丸田信子さん、産業経済部門の有村正行さんが表彰された。県知事らの来賓祝辞に続き、「松元の歩み」のライド上映、お母さんコース「ブリランテコール」による町民歌斉唱があつた。最後に町旗降納が行われ、松元の歴史を閉じた。

乗用型茶摘
み機導入

経済 坂之上茶生産組合、四元茶（内）生産組合が他地区に先駆けて乗用型（大型）茶摘み機（473万円）を導入、平成元年6月15日に2番茶の摘採が行われた。町の大半が兼業農家で農業従事者の高齢化が進

み、労働力の確保が年々難しくなっていた。産地間競争が激しくなる中、高品質が求められていたが、従来の可搬式では製品が粗雑になる傾向があった。生産農家が生き残るためにはグループごとに乗用型を導入して管理、摘採の必要性に迫られていた。摘採能力は大型で1日80—100㌥、中型で40—50㌥あり、高品質維持と労働力確保が期待された。

直木公民館隣に農畜産物処理加工センターが完成、平成6年4月8日に落成式があった。この建物は鉄筋コンクリート造り約450平方㍎で、国庫補助金6226万円、町費8067万円の事業費で作られた。農産物を加工処理する農畜産物処理加工室、味噌加工室、漬物加工室、農産物の技術開発を進める研究室や一般に販売する販売展示室など配置。特産のお茶を利用した独自の茶そうめんやピーナツ菓子の「茶ちゃピー」、それにホウレンソウのふくれ菓子、手作りみそ、酢昆布、高菜の調味漬けなど製造する。農家との連携を深めながら町の特産品の拠点としての役割が期待された。製品は同センターや健康センターなどで販売された。

7年2月1日にはJR鹿児島線薩摩松元駅下に、農産物加工品販売所がオープンした。農畜産物処理加工センターで作られた味噌、漬物、タレなどの加工品や町内で生産された農産物の販売を行った。扱う商品はほかに、ふくれ菓子、野菜、ミカンなどで、町内外の利用者に松元の特産品が一堂にそろう場として期待された。

平成14年3月末で閉鎖された春山にある旧鹿児島県茶業指導農場の県から町への財産譲渡調印式が4月15日、県庁で行われた。同農場は上伊集院村（昭和35年4月1日、松元町と改称）時代の昭和28年に村から県に移管された。県の行政組織の発展的な再編により閉鎖されたことに伴い現状のまま、町に財産譲渡され、

県茶業指導
農場跡地に
茶関連施設
を整備

町茶業農場として活用されたが、農場としての役割が終わり、跡地に「まつもとフレッシュ館お茶畑」が14年9月1日にオープンした。町内の採れたて野菜や農産加工品などを販売した。町内の農産物生産者らが立ち上げたもので、月曜日を除く午前8時半から午後5時まで営業、町内外の利用客でにぎわった。

「まつもとフレッシュ館お茶畑」が営業を行っていた敷地に、都市農村交流センター「お茶の里」が27年3月にオープンする。総工費は約9億円で、木造平屋の本館には農産物直売所や飲食施設などが入るほか、多目的広場、遊具広場なども整備され、地域の活性化がさらに進むことが期待される。

南九州西回り自動車道
―鹿児島道路―松元IC
C供用開始

町民の長年の夢であった南九州西回り自動車道の松元ICが平成10年3月26日に開通、開通式が行われた。開通したのは鹿児島道路（市来ICから鹿児島西ICまでの21・9キ）のうち、伊集院ICから鹿児島西ICまでの10・2キ。松元ICは当初鹿児島市方向だけとの出入りしかできないハイフインターだった。鹿児島西ICまでの通行料金は普通車200円で、所要時間は約5分。また、仁田尾跨道橋東側には高速バス停留所が設置され、バス利用者にも便宜が図られた。松元ICの開通で、広域的ネットワーク道路が形成され、町だけでなく、鹿児島市や周辺地域における産業や経済、観光、文化の振興発展にも大きく役立つことになった。



まつもとフレッシュ館お茶畑

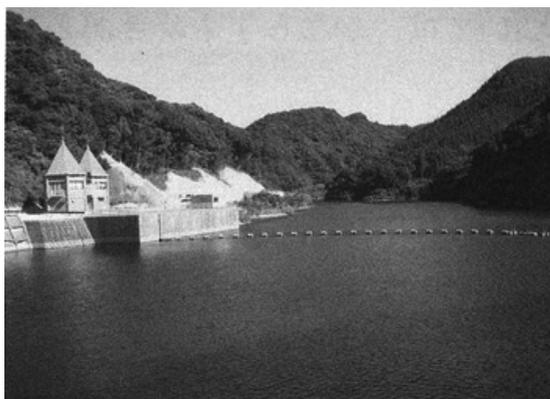
畑地潤す松
元ダム

畑地かんがい用に直木地区の高田川上流で建設が進められていた松元ダムの本体工事が平成10年3月に完成、11月11日から貯水が始まった。その後、段階的に貯水試験を行い、5年後の15年10月22日に竣工式と直木地区（山迫団地）の通水式が行われた。同ダムは重力式コンクリート形式で、総貯水量は64万立方メートル。堤長144メートル、堤高38・5メートル、満水面積は6・3ヘクタールの規模を誇る。

シラス台地で水源に恵まれず、基幹作物の茶を中心に晩霜や干害被害に長年悩まされてきたため、被害を防止するために松元ダムが計画された。昭和57年の県営かんがい排水事業計画に始まり、平成4年12月にダム建設工事に着工した。排水事業の総事業費は76億3200万円で、受益面積は茶畑、普通畑地、水田を合わせて171ヘクタール、受益農家は594戸。流量、水位などを監視する常時監視システムのほか、県内で初めて畑地かんがい施設管理のためGIS（地図情報）システムを採用した。設計図面や土地利用状況などデータを管理し、機器の故障などに迅速に対応し、都市近郊という有利な立地条件を生かした営農計画にも役立てられた。また、ダムの水は防災用水にも使用されることになった。

高齢者福祉
の拠点整備

社会 町のデイサービス・在宅介護支援センターが健康センター近くに完成、平成9年3月25日に落成式が行われた。センターは鉄骨コンクリート平屋建て、2億3998万円の事業費で、8年8月に着工してい



松元ダム

た。デイサービスセンターはマイクロバスやリフトつきバスで利用者の自宅近くまで送迎し、入浴や給食、日常動作訓練などが業務。1日に約20人の利用が可能となった。在宅介護支援センターは在宅介護に関する相談業務を行い、利用者に応じた保健・福祉など総合的に指導・助言を行えるようになった。

また、町が整備を進めていた介護予防拠点施設「すこやかランド石坂の里」が、14年1月完成した。延べ床面積は357・45平方メートル、アリーナや研修室(和室、調理室)、サロン(交流)室など。急速な高齢化に伴い介護を必要とする高齢者が増えていることや、少子化、核家族化によって家族介護が難しくなっていることなど、社会全体の老後の不安要因となっている。このようなことから、町では「生きがいの条件は社会参加である」との視点から、地域における社会参加や児童・生徒との交流、趣味、教養、文化、ボランティア活動等を推進するための拠点施設として、介護予防拠点施設の整備を進めていた。

クリーン・
リサイクル
センター竣工

日置地区塵芥処理組合のクリーン・リサイクルセンターが松元町入佐に完成、平成11年4月14日に竣工式が行われた。総事業費は国庫補助金、起債を含めて約68億円。組合を構成する松元、東市来、伊集院、郡山、日吉、吹上の6町のごみ処理を行うことになった。センターの敷地面積は140・99平方メートル。資源ごみを分別、成型するリサイクルを柱に、不燃物系ごみのリサイクル施設、可燃ごみの焼却施設、焼却灰やリサイク



介護予防拠点施設「すこやかランド石坂の里」

ル残渣を溶融し安定化させる溶融施設、雨水の浸透を防ぐ最終処分場など備えた一般廃棄物処理施設で、最新の技術を導入した。また、ごみ・環境教育にも生かせる研修室、展示室を備えたりサイクルプラザも併設した。合併後、センターでは、日置市のごみ処理を行っている。

シルバー人材センター設立

松元町シルバー人材センターが設立され、平成14年4月1日から業務を始めた。事務局は町老人福祉センター内に設置、会員登録は81人（男性44人、女性37人）でスタートした。業務内容は駐車場管理や文書管理事務、パンフレット等の配布、家庭内外の掃除、植木せん定、公園清掃などの分野で、家庭や企業等の依頼を請け負った。

充実する平野岡健康づくり公園

教育・文化 松元町平野岡健康づくり公園内にテニスコートが完成、平成3年5月19日に記念大会が開催された。このテニスコートは元年度から2カ年の事業として、造成費7200万円、コート整備費2240万円をかけて造られた。コートの広さは2423平方メートルで硬式2面、軟式2面の計4面のコートが取れる広さ。さらに、町民ふれあいの場づくりとして、元年度から整備を進めてきた多目的グラウンドが3年7月に完成した。このグラウンドは、総事業費3億8900万円（元年度1億9200万円、2年度1億9700万円）をかけて整備した。面積は1万7383平方メートルで、100メートル直線コース、200メートルコース、ソフトボール会場2面が使える広さ。また、照明施設8基、管理棟、倉庫、トイレなども完備した。町では美しい緑あふれる自然の中で、家族やグループでより快適にスポーツやレクリエーションが楽しめる施設づくりを進めており、完成したグラウンドは、公園のメイン施設として陸上やソフトボール、サッカー、各種レクリエーションなど多目的に使えるようになった。

5年4月10日には町健康センターが平野岡健康づくり公園内に完成。体育館は同日から、温泉は5月1日からオープンした。センターは町民の健康増進と体力向上に加え、ふれあいの場づくりとして、4年1月に着工、総事業費11億9222万円をかけて建設してきた。体育館と温泉を併設した施設は、全国的にも珍しい。建物は鉄筋コンクリート造り2階建て、一部鉄骨造りで、延べ床面積5236・68平方メートル。広々とした玄関、展望のいい休憩室(58畳と37畳の2室)、会議室など、利用者本位の工夫がなされている。体育館部分の1階はバレーボールコートが4面取れるアリーナ(屋内運動場)、両脇には待合室、男女更衣室が配置され、2階は観客席(442の固定椅子)とトレーニング室(健康器具設置)を設けた。温泉部分は1階東側にあり、ゆったりした浴室には高温湯、低温湯、電気湯、うたせ湯、ミストサウナ、高温サウナ、水風呂が設けられ、更衣室も和めるよう和風に設計されている。町民の健康づくりの拠点になると期待された。

また、公園の一角に体験学習の館「茶山房(さざんぼう)」と子ども遊園施設が、7年4月に完成した。この事業は、平野岡総合整備計画の一つとして、自治省の「ふるさとづくり事業」を導入して実施したもので、平野岡健康づくり公園の機能充実を図るのが目的。茶山房は多目的な体験学習の館として位置付け、鉄筋コンクリート造り2階建て、延べ床面積は718・43平方メートル。建設費は1億8703万円。1階に体験実



平野岡健康づくり公園

習室（240・5平方メートル）があり、施設の名称が示すように、松元茶の手もみ体験実習ができるように必要な器具も20台準備した。

また、1階には茶室を設け、茶どころ松元でお茶を点てることによって、心の安らぎを感じてもらおうことが可能になった。2階はスポーツ施設利用者やこの館を利用した人が宿泊できる和室が2部屋（42畳と30畳）と、ミーティングルームが設けられ、健康センターや多目的グラウンド、テニスコートなどの利用者の合宿所としての機能ももたせた。

健康センター内に設けられた温泉は「まつもと温泉」と命名され、14年12月10日にリニューアルオープンした。センターの温泉に専用玄関が完成したのに合わせ、名称を一般から募集した。これまで、温泉の入り口は体育館と併用で、大会などある時は大変混雑していたが、温泉専用の入り口ができたことで、利用しやすくなった。また、新たに休憩室も設けられ、健康器具も備えられた。

上谷口の松元中学校に隣接して町営弓道場が完成、平成7年12月7日、関係者約70人が出席して落成式を行った。木造平屋建て延べ面積316・02坪で、ふるさとづくり事業を導入して総事業費9507万円をかけた。6人立ちの射場、師範席、広い控え室、更衣室、トイレなど備えられた。

また、松元中学校の東隣には武道館が完成、10年3月20日に落成式が行われた。武道館は鉄骨造り2階建て、総面積1078平方メートルで、総事業費は2億1209万円。1階は男女ミーティング室、2階は柔道場と剣道場、師範室のほか、男女更衣室やトイレが設置された。日本一健康な町づくりを目指していることから、武道館完成によって、学校教育での活用はもちろん、武道愛好者の世代をこえた交流の場と、さらには青少年

町弓道場
武道館が完
成

年健全育成など生涯学習スポーツの拠点となることが期待されている。

中村晋也美術館オープン

日本では数少ない彫刻の美術館「中村晋也美術館」（財団法人）が平成9年4月19日、石谷・仁田尾団地内にオープンした。日本芸術院会員で鹿児島大学名誉教授の中村さんが館長を務め、正面玄関には、ヨーロッパで天空を自由に駆けめぐる天使の馬として不屈の精神を表すペガサスの彫刻が展示された。3階

建ての美術館内には、中村さんがこれまで制作した、愛、祈りなど人間の感情の内側を深く掘り下げた彫刻群82点が並んだ。2階まで吹き抜けになった展示場には人間の肉体と精神のエネルギーを表現した大作「太古の血潮」を展示。3階の「ミゼレーレの部屋」には8体の彫刻を陳列した。また、鹿児島市の「若き薩摩の群像」、伊集院駅前の島津義弘像などの原型も収蔵庫に並べられた。中村さんは、彫刻やあすの芸術・文化を語る場、彫刻家たちの心のふるさとなればとの思いを込めた。同館は松元の新しい文化の拠点になっている。

中村さんは19年に文化勲章を受章した。26年9月には、芸術文化の発展に大きく貢献したとして、鹿児島市名誉市民に決定、11月1日に授与式が行われた。



中村晋也美術館

「青少年健全育成宣言のまち」松元町を採択

松元町青少年健全育成大会と読書活動推進大会が平成13年2月17日、中央公民館で開催され、「青少年健全育成宣言のまち」松元町を採択した。

宣言の決議文には、①心が通い合い、規律ある家族づくりに努める②あいさつ運動や声かけ運動などを積極的にすすめる、地域の青少年に目を向け、連帯意識を高める③スポーツ活動、文化活動、奉仕活動などの集団活動に、青少年を参加させ心身を鍛えるとともに、社会の一員として自覚を高める④青少年が誇れる豊かな自然と、郷土愛あふれる環境づくりに努める―などを挙げた。

II 行政機構の変遷

町長

第4代 九万田 萬喜良（昭和59年7月9日～63年7月7日）

町総務課長から収入役を1期、助役を2期務めた後、昭和59年7月、畠中市太郎前町長の死去に伴い行われた町長選挙に立候補、無投票で初当選した。在任中、県茶業振興大会を地元で開催したほか、町庁舎を新築した。63年6月26日の町長選挙で新人の四元泰盛氏に敗れ、2期目はならなかった。63年11月、地方自治功労があったとして町民表彰を受けた。

第5代 四元 泰盛（昭和63年7月8日～平成16年10月31日）

任期満了に伴う町長選挙で、九万田萬喜良氏との一騎打ちの選挙戦を制し初当選。その後、平成16年の合併まで町長を5期務めた。明治大学卒業。会社勤務を経て、仁田尾保育園長、町議1期、地域公民館長を務

めた。町長在任中、第三次、第四次総合振興計画を策定。「自立ある町勢の発展につなげる」をモットーに、町営住宅や基幹作目の茶、畜産などの施設整備、平野岡運動公園整備などを推進。また、町おこしの「まつもとふるさとまつり」を定着させ、南九州西回り自動車道の松元インターチェンジ開設、農村総合整備事業導入など、数々の事業を手掛けてきた。平成21年春の叙勲で旭日双光章、25年度の県民表彰（地方自治）を受賞した。

助役

- 四元 昌景（昭和59年8月1日～昭和63年7月31日）
- 田中 勉（昭和63年8月1日～平成8年7月1日）
- 玉井 孝雄（平成8年10月1日～平成12年9月30日）
- 神戸 芳政（平成12年10月1日～平成16年10月31日）

収入役

- 石原 正（昭和59年8月1日～昭和63年7月31日）
- 有村 良信（昭和63年8月1日～平成12年7月31日）
- 児島 照文（平成12年8月1日～平成16年10月31日）

III 町議会

歴代議長

吉富 進 (昭和62年5月1日～平成3年4月30日)
吉満 光男 (平成3年5月1日～平成7年4月30日)
坂ノ上 優 (平成7年5月1日～平成10年9月24日)
田中 司 (平成10年9月25日～平成11年4月30日)
和田 幸一 (平成11年5月6日～平成16年10月31日)

歴代副議長

坂ノ上 優 (昭和62年5月1日～平成3年4月30日)
谷之口 操 (平成3年5月1日～平成7年4月30日)
和田 幸一 (平成7年5月1日～平成9年4月30日)
田中 司 (平成9年5月1日～平成10年9月25日)
石原 末治 (平成10年9月25日～平成11年4月30日)
倉内 保寛 (平成11年5月1日～平成13年4月30日)
森 与一郎 (平成13年5月7日～平成15年4月30日)

柿迫 重己（平成15年5月7日～平成16年10月31日）

町議会議員の選挙

	投票率	定数	立候補者数
平成3年4月21日	84・75%	18	20
平成7年4月23日	82・08%	18	23
平成11年4月25日	81・77%	18	26
平成15年4月22日	無投票	18	18

参考文献・資料 松元町広報紙、南日本新聞記事

第五章 郡山町

鹿児島市の東北部に位置し、甲突川本流と支流が東側を流れ、錦江湾に注いでいる。昭和31年9月町村合併促進法に基づき、郡山村と下伊集院村の一部(有屋田・岳)が合併し郡山町として発足した。平地の少ない地形だが、国道328号の開通を含め、道路網の整備のほか、情報網の充実、甲陵高校の開校など経て、過疎地域からの脱却を果たした。総合運動公園やスパランド裸・楽・良の開設などで、健康づくりを積極的に進めた。また、かごしま子ども文化の里や鹿児島自然学園が相次いで開設、子ども対象の施策にも力を入れた。

1 地方自治の変遷

総合振興計
画を策定

政治 昭和54年に第二次総合振興計画を策定し町政運営の指針として諸政策を推進してきたが、新しい視点、発想に基づいた町勢の発展の基盤を築くため、平成元年7月、同年度から10年度までを目標期間として、第三次総合振興計画を策定した。町中心部の道路拡幅などの都市計画の実施、農林業・観光の振興を柱として、元年の人口約8300人を10年には1万5000人、1人当たり所得も60年の2・3倍にあたる278万円と推計した。

将来像として「健康で活力にみちた住みよい町」を掲げ、①快適で調和のとれた住みよい町づくり(都市基盤の整備)②地の利を生かした活力にみちた町づくり(産業経済の振興)③健康で生きがいのある町づくり(福祉・保健衛生の充実)④豊かな心と創造性の育つ町づくり(教育文化の向上)の四つの基本目標を設

定した。

具体的には、まず都市計画では土地利用など進めるため、用途地域を決定。農林業との健全な調和を図るため、都市計画事業を総合的に実施するとした。交通・通信面では鹿児島市と北薩を結ぶ幹線道路としての国道328号の整備を掲げた。農業分野では、都市近郊農業の確立、土地基盤整備を挙げ、商工業は都市計画によるまちづくりを実施するとした。観光・レクリエーションでは史跡、文化財の活用と八重山・三重岳の緑のネットワーク整備など掲げた。

第四次総合振興計画を策定したのは、6年12月。本来は第三次の後期計画を策定する時期だったが、社会経済情勢の変化と地方行政の課題に対応するため、第四次計画の策定に至った。第四次総合振興計画は同年度を初年度、15年度を目標年度とし、基本理念は「まちがうるおいに満ちあふれ、人々がやすらぎを感じる郡山」とした。この理念は町が将来にわたって、町民はもとより訪れた人々がさまざま「うるおい」や「やすらぎ」を感じるまちづくりを行うことを目指している。「うるおい」は、甲突川に代表される自然のうるおい・やさしさ、農業をはじめとする産業活性化による経済的うるおいや活力、生涯学習を通じて育む心の豊かさ、を意味し、「やすらぎ」には、道路や住宅などの整った環境の中で、安全で快適な生活、保健・福祉の充実した環境の中で、健康で安心な生活ができる、という意味が込められた。

町づくりの基本目標としては、①水と緑に育まれた活力あるアメニティタウンづくり（生活環境）②優しさと気配りのぬくもりタウンづくり（保健・福祉）③資源を活かした生き生き産業づくり（産業振興）④個性あふれるふれあいの里づくり（観光・交流）⑤生涯学習のふるさとづくり（教育・文化）の5項目を設定

した。

5本の柱はさらに分野ごとに細分化し、体系的に主要施策、基本計画を示している。将来人口については、諸施策を積極的に進め、若年層を中心とした人口増加を期待して、15年に1万人を目標としている。同時に、今後、重点的に取り組む施策として(1)市街地振興(2)総合運動公園活用(3)八重山周辺(4)花尾神社周辺(5)都市農村交流(6)ひとつくりの6項目の「戦略プロジェクト」が提起された。

行政改革大綱を策定

平成5年10月から検討を進めてきた郡山町の第二次行政改革大綱が、7年3月策定された。昭和60年に第一次大綱が策定されて以来、町が時代の変化に応じて全国に先駆けて自主的に取り組んできた。第二次大綱は策定の目的、基本方針、当面の措置事項、今後の検討事項、継続的な行政改革の推進から構成された。当面の措置事項は、自治公民館への行政事務委託の見直しのほか、全部で10項目にわたり、改善策の基本的方向が示され、概ね1年以内をめどに実施に移すことが示された。具体的な推進にあたっては、町が一体となって取り組むとともに、町民をはじめ関係方面の理解と協力を得ながら進めるとした。

当面の主な措置事項を次のとおり掲げた。税金等の収納体制の見直しについては、口座振替を中心とした個人納付に移行するとともに、個人が納めやすい環境づくりを進める。行事等の見直しを図るため、行政内部や関係団体との連携を図りながら行事の見直しを進め、効果的で魅力のある行事の再編・創出に努めることを確認。外郭団体の事務・運営の見直しに向け、自主運営を促進することとした。また、時代に応じた組織の在り方を検討し、事務の改善や企画調整機能の充実などを進めるとともに、分掌事務や組織機構の見直しを進める。さらに、課の再配置や種類の整理などとあわせて、庁舎の増改築等を検討し、事務能率向上に

つなげるとともに、住民にとって利用しやすい環境づくりに努めることを掲げた。

14年3月には第三次行政改革大綱を策定、新たな時代に対応した行政推進を図ることとした。町は第二次行政改革大綱に基づき、行政改革の推進に積極的に取り組んできたが、長引く景気の低迷等による税収の落ち込みなど地方自治を取り巻く厳しい環境の中、更なる改革の推進に迫られていた。

第三次行政改革大綱は、めまぐるしく変化する社会経済情勢に柔軟かつ弾力的に対応できるよう体質を強化し、自らの責任において地域の課題を自主的かつ総合的に解決できる組織、機構づくりをめざし、そのために住民とともに企画立案・実行し、ともにその成果を評価する「住民参加と協働のまちづくり」に資するとした。

具体的方策としては、14年度から16年度までの3年間に集中して推進する項目を大綱に掲げ、実施にあたっては実施計画を策定し、主体的に行政全般にわたる事務事業、組織機構の再点検を行い、時代に即応した新たな視点に立った行政改革を推進することとした。推進項目として、事務事業と組織・機構の見直し、定員管理の適正化と給与の適正化、職員の能力開発及び人財育成、行政の情報化推進、公正の確保と透明性の向上、経費の節減・合理化等による健全な財政運営の推進のほか、公共施設の有効利用と管理の合理化、公共工事のコスト縮減と入札・契約手続きの改善、男女共同参画社会の推進、住民参加と協働のまちづくり、広域的な行政体制の推進など挙げた。

町の交通網整備を掲げた地域振興マスタープランが平成15年3月に策定された。まず、国道328号は南側の鹿児島市で国道3号と連結し、北薩へ通じる基幹的な道路であることから、拡幅等の整備を促進すると

地域振興マ
スタープラ
ン策定

した。国道3号へのアクセス道路については、合併により鹿児島市との一体性を確保するため、町道川田比志島線から国道3号に接続するアクセス道路の新設を促進する。また、合併関係町である松元町や鹿児島南部とのアクセス向上を図るため、一般県道小山田谷山線の延長等の整備促進を挙げた。

主要地方道については、吉田町とのアクセス向上を図るため、伊集院蒲生溝辺線の延長等の整備と川内郡山線を促進する。さらに、中央地区土地区画整理事業の中で、町中心部における交通利便性を向上させる。山間部における交通手段の確保を図るため、町内循環バスは継続するとした。

町制施行40周年記念式典と総合運動公園落成式を開催

郡山町の町制40周年記念式典と総合運動公園落成式が平成9年4月12日、同公園であり約400人が出席した。記念式典は甲陵高校吹奏楽部の演奏で始まり、池山泰正町長が「下伊集院村の一部と郡山村が合併して町が発足した。平たんな道のりではなかったが、農業振興、福祉、教育文化など町民の努力で発展を遂げている。豊かな自然を特性に、心一つにして魅力ある町づくりに取り組みましょう」とあいさつ。功労のあった個人6人と10団体を表彰した。記念祝賀会も開かれ、町制40周年を記念して公募したイメージソング「青と緑の宝箱」「ふるさとの風」の発表や、郷土芸能の「西俣八丁杵踊り」の披露もあった。

完成した総合運動公園の総面積は約21万平方メートル（うち6万6千平方メートルは町有地）。ふるさとづくり事業、まちづくり特別対策事業など導入、



総合運動公園

総額36億5900万円をかけ建設した。多目的陸上競技場は400坪と200坪コース、全面張り芝の多目的広場、人工芝6面と壁打ち1面のテニスコート、張り芝8コースのグラウンドゴルフ場のほか、児童広場、いこいの森、ジョギングコースなど設けた。

町制40周年記念の表彰は次のとおり。

一般行政部門 中村正、岩戸良治、石神盛行、谷口孝義、上野美義、重信明満▽地域活動部門 町消防団、交通安全協会、町商工会青年部、町生活改善グループ、マグニチュード21、花尾瓢箪村、社会福祉法人正栄会、町体育協会、町文化協会、青空市運営協議会

町は国際社会に対応した将来を担う人材を育成するために、「青少年海外派遣事業」を平成6年度から始めた。町人材選考委員会で第1回の派遣生に選ばれたのは、大河美幸さん（郡山中3年）と柳元理恵さん（甲陵高校1年）。派遣先はアメリカで、7月20日にあった出発式では、「与えられたすばらしい機会を大切にし、異国の文化を知ることになり、日本の文化を知ることになり、また、アメリカの良さをたくさん吸収していきたい」と決意を述べた。この事業は11年度まで継続された。

また、宝暦治水で活躍した郡山町ゆかりの薩摩義士の足跡をたどろうと、「第1回郡山町青少年の翼IN輪之内」事業が11年8月3日から3日間行われ、町内の子どもたちが岐阜県輪之内町を訪れ、義士の墓参りや同町の小学生らと交流を深めた。訪れたのは、小学5、6年生20人と引率指導者6人の計26人。一行は薩摩義士濱島紋右衛門の墓がある輪之内町の江翁寺を訪れ、一人一人線香を上げて、偉業に敬意を表した。また、義士たちが工事に携わった木曾川、長良川、揖斐川見学もあり、治水タワーから遠望しながら郷土の先

青少年を海外、国内に派遣

輩たちの苦勞をしのび、輪之内町の子どもたちとの交流会もあった。

郡山町閉町
式を開催

合併に伴う郡山町閉町式が平成16年10月24日、総合運動公園特設会場で開催された。式に先立ち、植樹祭が行われ、桜を記念樹として植樹、閉町記念碑が設置された。式典では、池山泰正町長が「合併が整ってもこれまで郡山町の長い歴史の中で先人が培ってきた歴史、伝統、特性をどう生かしていくのが課題で、行政と住民が一体となって取り組む必要がある。特に、これからは住民が行政に頼るだけでなく、地域のことは自分たちが主体となって築き上げていくのだという意識をもつことが大切。郡山町は将来に向かって、夢と希望の持てる魅力的な地域になるものと確信している」とあいさつした。表彰(3人)及び感謝状(40人)の贈呈後、来賓あいさつ、未来へのメッセージがあり、最後に町民歌斉唱、町旗降納で式典を終えた。式典後、合併記念町ふるさと祭が開かれ、会場では郷土芸能発表や農林業祭コーナーなど開設され、多くの町民が訪れた。

相次ぐ地域
おこし活動

経済 大平集落の老人クラブなどのメンバーが中心となって旗揚げした「花尾瓢箪村」の開村式が平成2年7月4日、町老人福祉センターで行われた。異業種交流振興会の「花尾イキイキ班」の代表である大國寺住職・宮下亮善さんの呼びかけで実現にこぎつけた。花尾三山参り(花尾神社、かくれ念仏、大國寺)の参拝者に記念品として瓢箪や地場産品等を販売し、村民一同の福祉向上に寄与するのが目的だった。花尾瓢箪村は翌年1月に開催されたさつま国連会議(民間主導のむらおこしパロディー王国の県内交流連合体)から県内19番目の独立国として認証された。

また、地域おこしグループが21世紀の町づくりを目指そうと、「マグニチュード21」を結成し、5年4月24日川田温泉で発会式を行った。この会は「まず自分自身を磨き、自信を持ち、地震を起こし、21世紀を創

ろう」との願いを込めて名付けた。毎月21日に定例会を開くことやイベント、ものづくり、自然、歴史、芸術文化などの部会組織を結成し、学習会や意見交換など通して行動を積み重ねていくことを確認した。発会式に先立ち、会の持ち味である「ヒヨウヒヨウとタンタンと気取らずにいこう」を生かし、ヒヨウタン植えに挑戦。百成と明日香の2種類約30本の苗を植え付けた。

東部研修館
が完成

平成4年度の県単独事業「むらづくり整備事業」の補助を受け、建設されていた東部研修館が5年3月に完成した。それまで使用していた西有里研修館の利用者が多く、建設を要望する声が高まっていたため、3年3月に用地を確保した。東部研修館は木造平屋建てで、床面積は293・56平方メートル。集会室100人、小会議室20人程度収容でき、農産加工室は味噌加工、菓子類製造、めんつゆ、焼き肉のたれ加工、仕出し等に使用できるようになった。さまざまなサークルやグループでの料理作り、趣味活動などに活用できると期待された。

西俣工業団
地が完成

郡山町の西俣で造成が進んでいた工業団地が平成3年3月に完成した。農村地域工業導入促進法に基づく事業で、面積は2・2畝。町の活性化対策の一環として着手した。工業用水は日量1千リットル取水可能で電力は特別高圧線と普通高圧線を引いた。鹿児島空港まで車で45分、九州縦貫自動車道鹿児島北ICまで20分、国道3号まで3分と、インフラやアクセスは企業にとって魅力的な立地。就業機会の増大を図り、町民所得の向上を目指すため、積極的に企業誘致を行い、進出希望の企業に分譲することになった。

八重山公園
がオープン

八重山山麓に建設していた八重山公園が完成し平成4年5月3日、オープンイベントが開かれた。鹿児島市街地や桜島、開聞岳を望む大パノラマが楽しめ、自然環境を生かした公園は町内はもとより、周辺住

民のレクリエーションの場として期待された。公園整備は、鹿児島市民の水がめ・甲突川の源がある八重山地区に自然を生かした公園を造って地域浮揚を図ろう、と平成元年に事業を始めた。総事業費は約6億3千万円。国のふるさとづくり特別対策事業やふるさと創生資金などを財源にした。国道328号沿い、八重山ふもとの5鈔余りの自然公園内には鳥が飛び立つ姿をイメージした野外ステージ、芝を敷き詰めた多目的広場、幼児広場、草スキー・ロングスべり台がある遊戯広場、18のポイントを備えたアスレチック広場など傾斜や景観を生かした施設を造った。散策道が公園内を巡り、森林浴やバードウォッチングもできる。

公園内には八重山キャンプ村のコテージ棟も整備され、10年5月1日にオープンした。9年度から林業構造改善事業を導入し、森林資源のもつ公益的機能の再認識と農山村と都市との交流を図る拠点として建設された施設。コテージは全部で7棟（うち1棟は管理棟）。すべて木をふんだんに使ったログハウスで2階建て、延べ床面積52平方メートル。コテージ内にはテレビ、冷蔵庫、浴室、シャワー、水洗トイレ完備。テーブルなどの木製家具は郡山産の木材を使用した。標高約400メートルにあり、鹿児島市、錦江湾を一望できる絶好のロケーションとなった。

八重山キャンプ村にはさらに、交流促進センター「てんがら館」が11年4月2日に落成した。「てんがら館」



八重山公園

の名前は、町に伝わる「天狗とガラッパ今昔物語」に登場する子ども「天ガラもん」に由来している。落成に合わせ子ども劇場を開催、日本や西洋の大道芸が披露された。同館には10―15人宿泊できる大部屋が2室あり、宿泊を伴わない時間利用もできる。自炊用の厨房・食堂、浴室、交流室があり、地域の育成会や各団体、スポーツ団体、仲良しグループなど、さまざまな団体が利用している。

竹林公園内に特産品の館「八重の里」オープン

特産品の館「八重の里」が、平成8年11月15日にオープンした。場所は厚地の国道328号沿いの竹林公園内。町観光と情報発信基地を目指すのが目的だった。タケノコをモチーフにしたデザインで木造平屋建て、床面積219平方メートル。事業費約6千万円。周囲には、県のみどりの景観拠点整備事業による「竹林公園」が広がる。木の香りが漂う建物では新鮮な野菜、木工品、手打ちソバなど販売。中でも目玉は町内女性グループが、同館でつくる焼きたてパン。「八重の里のパン屋さん」と名前をつけられたパンはクロワッサン、ピロシキなど10種類。町特産野菜レイシを使ったパウンドケーキも並んだ。パン、ケーキとも展示・販売室の隣の加工室で製造され、焼きたてが味わえるようにした。

道路整備、着々と進む

国道328号の郡山町入来峠下に建設中だった峠大橋が完成し、平成2年10月6日、渡り初め式があった。狭い急カーブの解消が期待された。峠大橋は登はん車線を含め、幅12メートル3車線、長さ95メートル。工期3年8カ月、総工費8億3千万円。郡山町内の国道328号整備は昭和47年(第1期郡山工区)、50年(第2期油須木工区)、55年(第3期厚土工区)に分け実施。峠大橋完成で郡山地区の整備は完了した。

平成14年3月26日には、西俣上地区と常盤地区で建設を進めていた県営農免道路の1期工事分1・3キロと轟橋が完成し、開通式が行われた。町を横断する道路の一部で、利便性が向上した。県営農免農道整備事業

郡山地区の計画は、町道里岳線と県道小山田川田蒲生線を東西に結ぶ全長7^〇キで、工事が採択されているのは3期工事分計3・5^〇キ。1期工事の完成で里岳線と主要地方道郡山樋脇線がつながった。8年に着工し、総事業費は8億3500万円だった。

町を横断する県道伊集院・蒲生・溝辺線の東俣バイパスは平成15年4月に完成、開通式典が5月9日に行われ、一般車両の通行ができるようになった。同線は伊集院町を起点とし郡山町を横断し、吉田、蒲生町を経て溝辺へ通じる主要地方道。今回工事が行われたのは、油須木の賦合地区から東俣の永山口までの総延長1800^〇キ、幅員6^〇キで、うちバイパスが1600^〇キ。9年9月に着工、総事業費は21億5千万円。バイパス完成で900^〇キ短縮された。

農村情報連
絡施設が開
局

社会 昭和61年度から2年計画で事業が進められてきた郡山町の農村情報連絡施設が62年4月1日に開局した。役場内に親局を設置し、61年度事業で屋外子局17カ所、戸別子局1320台、移動局15台（消防車7台、公用車8台）、62年度事業は戸別子局（補助対象残局124戸、非農家1152戸）、遠隔制御局、農協設置など整備を進めた。この事業の結果、農業・災害・気象情報だけでなく、行政・一般広報なども発信できるところになった。

町青年団が
再興される

10年近く途絶えていた郡山町青年団が平成2年5月11日に結成大会を開き、男性22人、女性22人の計44人で再出発した。大会には町長、副議長、教育長も駆けつけ、再興を祝った。年間活動計画、予算、団則、役員選任等が協議され、団長に高橋秀幸さん、副団長に坂口悼美さんが選出された。懇親会では「町の発展のためにがんばろう」「楽しい青年団にしていこう」などの声が上がった。青年団活動で仲間との交流を通して、

愛泉園在宅
介護支援セ
ンターが業
務を開始

青年期の在り方を学び、郷土づくりの担い手として活躍が期待された。

在宅介護支援センターと老人デイサービスセンターが東俣に完成し、平成7年4月12日に運営事業の開始式がセンター内であった。運営は、社会福祉法人正栄会の特別養護老人ホーム「愛泉園」に委託した。在宅介護支援センターとデイサービスセンターは単独の施設として県内で初めてつくられた。町有地3336平方メートルの敷地に、鉄筋コンクリートづくり平屋建て574平方メートル（デイサービスセンター489平方メートル、支援センター85平方メートル）を建設した。事業費は1億9700万円。デイサービスセンターでは入浴・給食サービスや日常動作訓練等の事業を行った。在宅介護支援センターでは、在宅介護に関する各種の相談業務を行い、利用者の状況に応じ、保健・福祉の両面から総合的な指導、助言を行う。

コミュニ
ティセン
ターが相
次ぎ
完成

花尾地区の交流活動の拠点として建設が進んでいた花尾コミュニティセンターが平成8年10月完成した。平屋建て和風デザインで建物面積180平方メートル。財団法人自治総合センターの助成金2千万円（宝くじ助成金）を財源として総事業費は約4千万円。伝統芸能伝承の場としても利用されることになった。

油須木コミュニティセンターが完成したのは、10年9月6日。県営農村活性化任環境整備事業の特認事業として、伊集院耕地事務所が主体となった。ドーム形の外観が特徴で鉄骨造平屋建て、事業費は6019万円。床面積224・46平方メートルで、約1000平方メートルの大会議室をはじめ、小会議室、調理実習室があり、お年寄りや体の不自由な人が使いやすい多目的トイレなどを備えた。

常盤保育所跡地には常盤コミュニティセンター「ふれあい館」が、12年2月22日完成した。県営農村活性化任環境整備事業として建設した。建物は鉄骨平屋建て、延べ床面積約512平方メートル。バレーボールやバド

ミントンなどの競技ができる多目的ホールや調理室などがある。総工費は約1億2200万円。12年度は、周辺整備に取りかかりグラウンドなどを整備した。同じ敷地内に鹿児島県子ども劇場協議会が運営する「かしま子ども文化の里」があり、町は保育所閉園後の常盤地区の新交流拠点として全体を活用していくことにした。

13年3月には甲突集落に甲突コミュニティセンターが完成した。老朽化した坪久田公民館の建物を県営農村活性化住環境整備事業の導入で建て替えた。木造平屋建て約180平方メートル。総工費3871万円。大広間、小会議室、調理室などを備えており、学習や交流、災害時の避難場所などに使われるようになった。

郡山町シルバー人材センターが平成11年11月9日発足した。町老人福祉センター内に事務局を設置、会員を募集してさまざまな仕事を請け負うことになった。具体的には庭の清掃や除草・草払い、大工、庭木のせり込みなどが対象となった。

「スパランド裸・楽・良」
オープン

東俣の総合運動公園内に建設を進めていた温泉活用型健康増進施設「スパランド裸・楽・良（ら・ら・ら）」の竣工式が平成12年7月3日あり、10日からオープンした。スポーツ温浴施設と各種競技施設、宿泊・研修設備などを組み合わせた健康づくりの施設は九州で初めてだった。

総合運動公園全体を活用し、「スポーツ健康交流基地」と位置づける。町が設立した健康交流促進財団が中心となり、健康づくり支援、文化活動、地域資源のPRといった幅広い事業を展開。全国トップクラスのスポーツ選手から市民の体力づくりまで幅広く対応し、各種大会などの誘致も目指すことになった。

スパランド裸・楽・良は延べ床面積約4748平方メートル。鉄骨鉄筋コンクリート造り地上3階、地下1階。

総工費15億932万円。運動効果やマッサージ効果を高める各種コーナーを配置。水着で入るゾーンを設けたのが特徴で、ほかに露天風呂などの入浴設備、トレーニングルーム、和洋レストラン、18室ある宿泊部分などを備えた。宿泊部分には、身体障害者や高齢者が利用しやすい特別室も設けた。

また、スパランド裸・楽・良の向かいには郡山町交流施設「悠遊館」を建設、14年3月1日オープンした。悠遊館は鉄骨造り（一部鉄筋コンクリート）2階建てで、面積は469・20平方メートル。高齢者相互の交流及び、青少年等のふれあいの場として活用し、高齢者の生きがいづくりや社会参加を促進するのを目的として建てられた。

教育・文化

町と鹿児島県子ども劇場協議会は、町立常盤保育所

児童・子どもの健全育
成を図る施設
が相次ぎ開

跡地を活用して「かごしま子ども文化の里」を開設することになり、平成11年3月21日にふるさと協定の調印式があった。子ども劇場は、舞台芸術鑑賞とキャンプ、遊びなどの自主活動を柱に、全国に展開する文化団体で、以前から県内で活動の拠点を探していた。常盤保育所が閉所となることから、その跡地を利用して「子ども文化の情報発信基地をつくっていこう」と町と劇場の意見が一致した。全国の子ども劇場でも、行政と連携した拠点づくりは珍しいケースだった。調印式には、池山泰正町長ら関係者約130人が出席した。調印後、「かごしま子ども文化の里」のプレートと友好の鍵の贈呈があった。



スパランド裸・楽・良（ら・ら・ら）

常盤保育所は、旧常盤小学校跡で広い校庭と木造平屋の建物があり、敷地面積約7700平方メートル。町が土地、建物を提供、劇場が管理運営を行う。異年齢集団でのキャンプ合宿や農業体験、自然を利用した体験教室、芸術家と触れ合うアートキャンプ、演劇活動などが展開され、平成26年も延べ1千人ほどが参加している。

民間が設立・運営する郡山保育園が、11年4月1日に開園、3日に入園式が行われた。町立の郡山、常盤の両保育所を統合し郡山地区に建設した。新保育園は社会福祉法人笹桐福祉会（鹿児島市）が設立・運営。0歳―6歳を預かり、新たに午後7時までの延長保育を始めたほか、小学1―3年を対象にした学童保育も実施するコミュニティ児童館も併設した。定員は保育園が90人、学童保育が40人とした。

保育所統廃合は町が少子化と行政改革の必要から計画した。常盤保育所に子どもが通っていた常盤、大谷の両地区で住民から存続を要望する声が出ていたが、町は「財政的に困難。民間運営で多様な保育サービス充実させたい」と統廃合を決定。常盤、郡山両保育所を3月に閉所した。入園式には園児と保護者ら約200人が出席し、真新しい園舎でのスタートを祝った。

児童館は旧町立郡山保育所の跡地を活用し、児童等を主体にパソコン指導、幼児とその母親を対象にしたサークル活動や育児相談、また子育て支援事業や仲間づくりの場として利用できる。児童館の名称は、町内



かごしま子ども文化の里プレートの贈呈

県内初の情緒障害児短期治療施設「鹿児島自然学園」が開園

の小・中学生から応募があった178点の中から覚えやすく親しみのもてる「わくわくパンダ」が選定された。児童館には集会場、図書室、遊戯室、園庭（砂場、滑り台、幼児用遊具、ジャングルジム）などが設置された。なお、児童館は合併時に鹿児島市の児童センターとして引き継がれた。

鹿児島県内初の情緒障害児短期治療施設（児童心理療育施設）「鹿児島自然学園」（生駒季隆園長）が平成14年3月21日、岳に開園した。社会福祉法人くろしお会が運営する施設で、九州で3番目。

情緒障害児短期治療施設は、児童福祉法で定められており、摂食障害や引きこもりなど軽度の情緒障害がある子どもを入所か通所の形で受け入れ、医療・福祉・教育の専門家が連携して治療にあたることになった。

対象は小、中学生。保護者の希望を受けて、県児童総合相談センターが利用者を随時決定する。スタッフは医師、セラピスト、生活指導員など24人。そのほか、施設内に郡山小・中学校の分教室を置き、教師2人が常駐。入所者は分教室で授業を受ける。定員は入所35人、通所15人。4月は、入所6人、通所3人からスタートした。

鹿児島県は、9年に策定した子育て支援総合計画「鹿児島のびの子どもプラン」の中で情緒障害児短期治療施設の整備を打ち出した。社会福祉法人くろしお会は、情緒障害児短期治療施設運営を目的に同年設立された。途中、地域住民の反対運動や費用面の問題な



情緒障害児短期治療施設「鹿児島自然学園」

どで計画がとん挫したこともあったが、12年7月、郡山町に設置することが決まり、施設の建設など準備が進められてきた。

花尾神社社
殿が県指定
文化財に

鹿兒島県文化財保護審議会は平成14年3月6日、花尾神社（本殿、祝詞殿、幣殿、拝殿）を含む3件を県指定有形文化財（建造物）に指定するよう県教育委員会に答申、4月23日付で指定された。花尾神社は18世紀前半から中ごろに建立され「さつま日光」とも呼ばれる。本殿と拝殿を祝詞殿、幣殿でつないだ複合社殿であり、本殿は中心である身舎を前後に分けて、前方を建具で囲んだ室となっており、後方には宮殿3基が須弥壇に安置されている。この形式は県内には存在しない。また、本殿の板壁の絵画や祝詞殿などの天井に描かれた草花の絵401枚の色彩構図や、全体としてのまとまりと色彩の美しさが特徴で、県内を代表する神社建築として評価された。

II 行政機構の変遷

町長

第2代 中村 正（昭和42年5月1日～平成3年4月30日）

町議から助役を3期12年務め、昭和42年5月に町長に就任。6期24年間町政のかじ取りに携わった。平成3年4月の町長選挙で新人の岩戸良治氏に敗れ、7期目はならなかった。この間、「健康で活力にみちた住みよい町」を目指し、さまざまな施策を推進。公民館や学校の統合、甲陵高校の誘致などに尽力した。日置郡町長会長、市町村自治会館管理組合長、町体育協会会長など歴任。4年には地方自治の発展の功労が評価さ

れ、自治相から表彰を受けたほか、秋の叙勲で勲四等瑞宝章を受章した。

第3代 岩戸 良治（平成3年5月1日～7年4月30日）

平成3年4月21日にあつた12年ぶりの町長選挙で現職の中村正氏を破り、初当選を果たした。12年間町議会議員を務め、そのうち7年8カ月間が議長職。町長任期中、「役場は町民のためにのみ存在する」との信念のもとに、町政を推進。川田県営住宅の建設、住環境整備事業及び総合運動公園の着工、都市計画事業の着手等、大型事業の導入や21世紀へ向けての総合振興計画の策定、横断道路の建設計画策定など、町発展の基礎固めを行った。病気を理由に7年4月30日、1期で退任した。16年秋の叙勲で旭日小綬章を受章した。

第4代 池山 泰正（平成7年5月1日～16年10月31日）

平成7年4月23日の選挙で新人同士の一騎打ちを制し初当選。3期町長を務めた。奄美大島・笠利町出身。鹿児島県庁の総務部財政課長補佐から助役に出向後、首長に就いた。総合運動公園、中心部の区画整理事業、第四次総合振興計画を積極的に推進。観光拠点整備や環境保全型農業、花尾地区活性化対策事業、幹線道路整備、高齢者福祉施策にも力を入れた。合併後の16年11月に行われた市議会議員増員選挙郡山選挙区選挙では無投票当選した。鹿児島奄美会会長を務める。

助役

前田 百千（昭和60年4月1日～平成3年6月10日）

池山 泰正（平成4年4月1日～平成7年2月24日）

藪田 陸雄（平成7年7月1日～平成16年10月31日）

収入役

藪田 陸雄（平成元年3月1日～平成7年6月30日）

木場 新浩（平成7年7月1日～平成15年6月30日）

III 町議会

歴代議長

谷口 孝義（平成2年12月25日～平成3年4月29日）

上野 美義（平成3年5月1日～平成6年12月22日）

重信 明満（平成6年12月22日～平成7年4月29日）

益満 勝彦（平成7年5月1日～平成11年4月29日）

白坂 親志（平成11年4月30日～平成11年9月28日）

盛満 一兵（平成11年9月28日～平成16年10月31日）

歴代副議長

桑原 影秋（平成2年12月25日～平成3年4月29日）

請園 徹志 (平成3年5月1日～平成3年10月10日)
 重信 明満 (平成3年12月11日～平成6年12月22日)
 白坂 親志 (平成6年12月22日～平成7年5月1日)
 盛満 一兵 (平成7年5月1日～平成11年4月29日)
 東 洋一 (平成11年4月30日～平成15年5月2日)
 多丸 良一 (平成15年5月2日～平成16年10月31日)

町議会議員の選挙

	投票率	定数	立候補者数
平成3年4月21日	90・23%	18	20
平成7年4月23日	87・98%	16	18
平成11年4月25日	85・09%	16	22
平成15年4月27日	79・79%	16	19

参考文献・資料 郡山町広報紙、郡山町郷土史、南日本新聞記事

